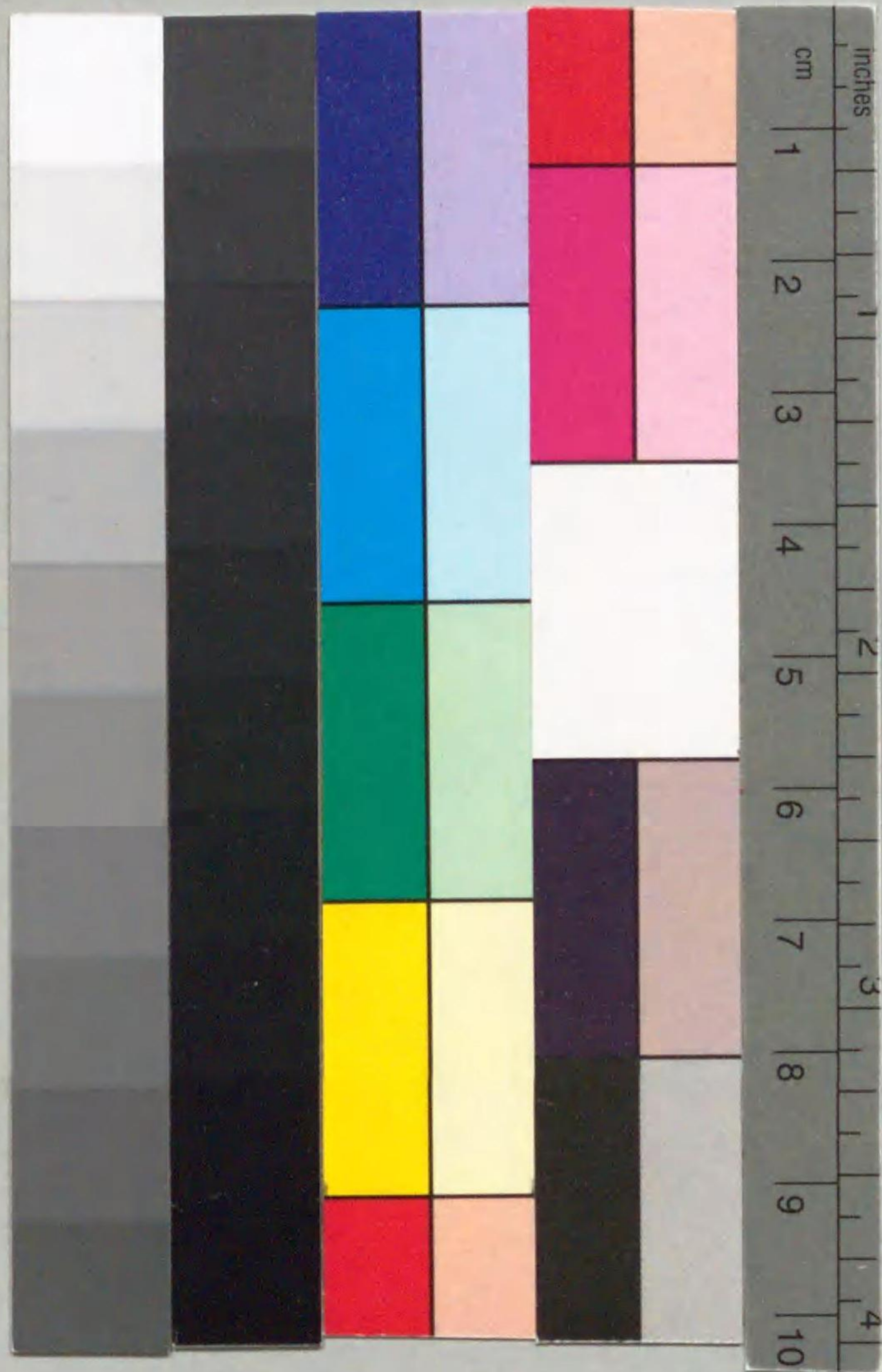
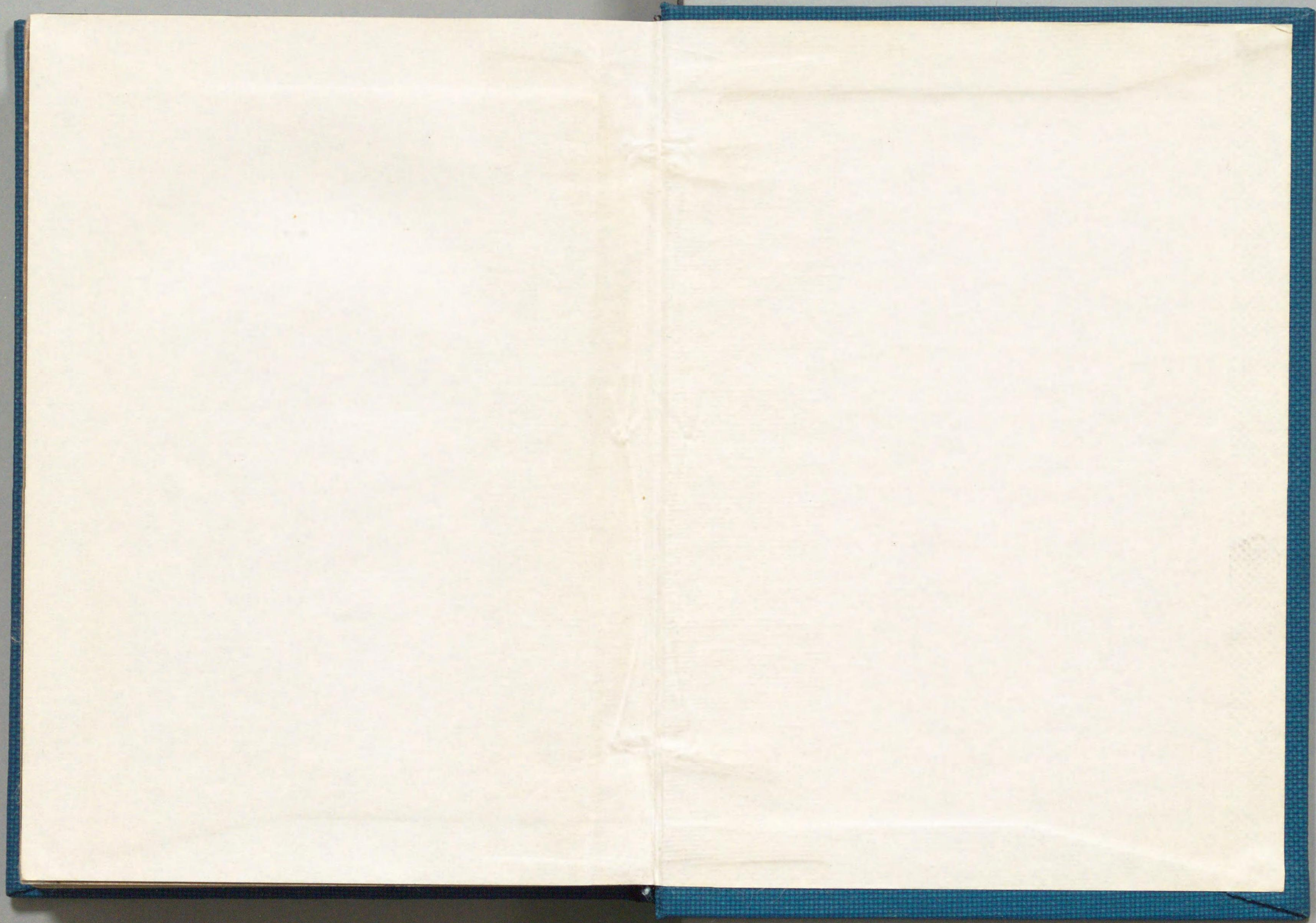


915.6
T0454z



00685498





5467



順禮社行

東京 警醒社書店

徳富健次郎著

第十五版

[Blank page with faint horizontal lines and minor stains]

K. Sumitomo.

July 24th 1916.

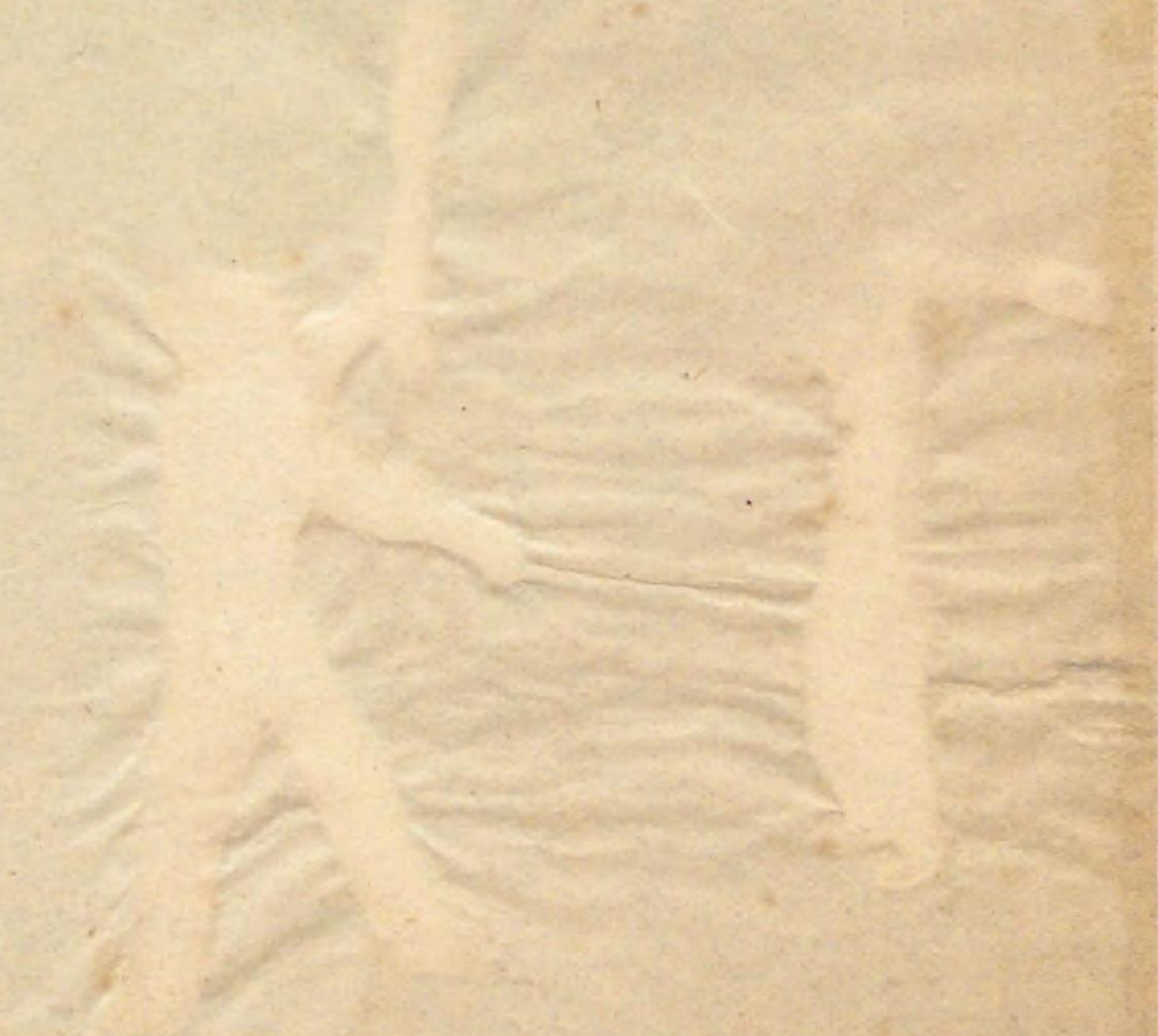
Tokyo.
Japan.



順禮紀行

德富健次郎著

K. Yamamoto
July 24th 1916
Tokyo Japan



915.6
To 454 子

伴なひて行くべかりし

吾妻に

任友務氏寄贈書



685498

今年三月の初、ある日伊香保の山に雪を踏みて赤城の夕
榮を眺めし時、不圖基督の足跡を聖地に踏みて見たく、
且トルストイ翁の顔見たくなり、山を下りて用意も匆々
順禮の途に上りぬ。四月四日横濱を出で、八月四日敦賀
に歸る。百二十日、舟車六千里、電光と往き、石火と復
へつて、行程を顧れば茫として夢の如く、已に印象の六
七分を失ひぬ。山陽の詩にこれあり、「肥山雲霧薩海風、
回首游蹤總雪鴻、當時每思向君語、如今半墮恍惚中」
真に此感あり。

二
道は近きちかにありて之これを遠とほきに求もとむ。泉いづみは脚きやく下かにあり、掘ほらざるのみ。此この眼め開ひらく時とき、宇う宙ちゆう吾われにあり。此この眼め開ひらかすば、悟ご空くうの雲くもに乗のつて無む限げんを走はしるも終ついに何なんの獲うる所ところぞ。余よは吾わが順じゆん禮れい行かうの唯ただ自じ己この愚ぐを知しれるに終をばりて、一いち物ぶつの人ひとに齋またらし歸かへれるものなきを恥はづ。

一九〇六年十二月三日

東京青山に於て

徳富健次郎識

目次

一、	船中雜記	(横濱より坡西土)	： 一
一、	埃及瞥見	：	： 三〇頁
一、	エルサレムへ	：	： 五〇頁
一、	エルサルム及附近の十二日	：	： 六四頁
一、	馬上一三日の記	(エルサレムよりナザレ)	： 一四〇頁
一、	詩的ガリラヤ	：	： 一七〇頁
一、	史の海詩の嶋	(ハイファより君士丹丁堡)	： 二一五頁

行程略圖



- 一、莫斯科
- 一、西伯利亞鐵道
- 一、愛する我故國

順禮紀行

徳富健次郎著

船中雑記

（横濱より彼西七）

門出

まつはる吾子を椽より蹴落して出家せし昔人さへあるを、
さりどは贅澤なる順禮の門出よ、父、母、姉、妻、甥、

姪と共に「主の祈」をなし、讚美歌「朝日はのぼりて世を照せり」を歌ひて、余は逗子老龍庵を立出づ。一九〇六年四月四日、うららかなる朝、富士は霞の空にかゝりて、此世のものとも思はれざりし。

今日北條時宗の六百年祭をなすとして、鎌倉圓覺寺の門前に彩旗球燈かけ列ねたるを車窓より眺めつゝ、横濱に行きて備後丸に乗りぬ。野毛山の櫻は花に四五日の笑紅に含めり。

甲板も棧橋も眞黒の人、送らるゝと、送ると、彼處も、此處にも、點頭、握手、哄笑。知友に秘し、家族の送る

をも辭して、飄然順禮の途に上れる余も、流石に羨まし

く、一人位は間違ひても送る者のあれかしと眼を見張りしも、甲斐なかりき。
十二時出帆。坡西土は八千三百海里のあなたにあり。

美なる日本

五日、夕神戸着。京に上りて、姉の家いへに宿る。
六日、東山の霞かすみを分けて、兄あにと新嶋先生にいじませんせいの墓はかに詣まうづ。

七日、神戸解纜。瀬戸内海の花くもり、晝は我船淡墨の
書の中を行き、夜は月おぼろに吾魂限りなき夢路を辿る。
八日、門司に泊して石炭を積む。關門海峡春雨蕭々。
日本に別れむとして春の雨

四

さらば日本よ

九日、門司拔錨。

さらば日本よ。余は終に爾を愛せざる能はず。爾は幼稚
なれども、確に大なる未來を有す。爾が理想を高くし、

志を大にし、自ら新にして、此美なる國土に爾を生み玉
へる天の恩寵に背かざれ。
爾の頭より月桂冠を脱ぎ棄てよ。「劍を執る者は劍にて亡
びむ」。知らずや、爾が戦は今後、爾が敵は北にあらず、
東にあらず、西にあらず、はた南にあらず、爾が敵は爾、
爾が罪、爾は爾自身に克たざる可からざるを。
爾の神を畏れ、爾の隣を愛し、爾の額に汗し、爾の汚を
洗ひ、爾が劍を抛ち、爾が砲臺を毀ち、爾が税關を開き、
爾が四周の海を風の思ふまゝに掃ふ如く爾が胸を世界に
向つて開け。日を旗じるしとする民、爾が義の日を四海

五

に輝やかせ。

方舟の鴿の如く

玄海風浪あり。六千餘噸の搖籃をゆする海の力よ。身は
唯赤子の如く船房に臥すのみ。
余の船房は備後丸の左舷、下甲板、四疊半程の室、六個
の床を凹字形に二重に設く。舷窓一個徑一尺、光を納れ、
風を入れ、無邊の天と海とを望む。南米ブラジルに行く
人一名、ミラン博覽會に行く人二名、埃國の新聞記者に

して艶罪ありしとかいふ人一名、これ余が同室の友なり。
戸を開けば、三等室、薄闇くして、棚板に蒲むしろを敷
くのみ。特別三等の白き藁布團、赤毛布、洗面臺さへ一
個を備へたるに比すれば、差少しく大なるに過ぐ。濠洲
の眞珠採取に行く紀州青年の一组、北米に水力電氣の研
究に行く青年、餘は上海、香港、新嘉坡に行く人々。支
那人の家族、學生もあり。
郵船會社歐洲航路復舊後の初航とて、一二等は満員、九
分は、日本人なり。外交官、陸海軍武官、文武の留學生、
劇の研究に行く人、某吳服店の一行、郵船會社員、雜多

の人を寄せたり。
皆發展日本の潮が送り出したるもの。知らず、余は何の
爲にかさまよひ出でたる。余は知らず。唯ノアの方舟を
出でし鶴の如く、橄欖の一葉をついばみて歸らば足りな
ん。

上海

十一日午後上海埠頭投錨。
城内は見ず、居留地を瞥見して、記憶に残れるもの。

公園の門にたてし華人不可入の制札。

六尺ゆたかの印度人の巡查が、辮髪をくゝり合はして支
那人三名を押送し行ける。

朝市場の人込に、毛糸の大黒帽かぶりし二十あまりの西
洋婦人が、足をくゝりし生鶏を逆手に提げながら、不承
知顔の鳥屋が鼻先に指三本つき出し居たる。

香港

十三日、午後上海拔錨。

十四日、霧あり、汽笛を鳴らして行く。

十五日、雷、電、夕立。熱帯近し。

十六日、午前香港着。まさに我梅雨の天気、不快。

十七日、上陸。眼色、足音、肩で切る風、「金、金、金」

と喚く市街を過ぎ、公園の蟬の音に夏に驚き、ケーブル
カアにて山を攀ち、白霧濛々見るものなきに困じ、下り
て東洋一と稱する闊き市場に果物を買ひ、大雨にぬれて
歸る。

熱帯の海

十八日、朝香港拔錨。香港を出て旅心定まりぬ。

昨日より中央甲板一面に日遮を張りたれば、三等船客こ
れより多く甲板生活をなす。

十九日、今日より浴衣なり。海色濃きサツファイアをな
して、美云ふ可からず。

二十日、海上に銀の蝶の閃めくは、飛魚の散るなり。剽
軽なる海豚、おりく身を跳して船を追ふ。

二十一日、夜深けて船首甲板に出づ。人無し。温かなる

風面を撫で、黒ずみたる空、恐ろしき星の數なり。船は徐ろに黒き海を分けて南し、燐波紫陽花の如く兩舷に湧く。同室の人來りて天を仰ぎ歎じて曰く、生來曾て斯る星の夜を見ずと。

エホバよ、爾の事跡はいかに多なる、これらは皆爾の智慧にてつくり玉へり。

(詩第百〇四篇二十四節)

二十三日、朝微雨あり、日遮ぬれて涼しと思ふ間に乾きて、厚き帆木綿越し腦天に照つくる赤道間近き日の威畏るべし。船は虎住むシヨホールを右に、椰樹茂る嶋を左

に見て、十一時新嘉坡着。唯一人を剩して、隣の三等客は皆船を下りぬ。

新嘉坡

午后上陸。三板に下る頃、蘭領の嶋の方に、黒雲涌き、雷電しきりなりしが、波の上三町ばかり行く程に、風颯と吹いて、白雨頭上に落し來ぬ。少年の支那舟子が教ふるまゝに、同行諸君とアツタツプの篷引被ぎ、息を凝らして舟底に蹲まる。漸く棧橋に着き、東洋車を僦ふて植

物園に赴く。雨も止みぬ。此驟雨日々あるが爲めに新嘉坡は凌ぎよしと。

熱帯の色何にある。並木の槐の花朱に燃へたる。澁茶色の真帆片帆。黒光する黒檀色より赤銅色に到るまでさまざまに灸られたる印度人馬來人の皮膚の色。檳榔子を噛みカレーを嗜む其口の牡丹を吐かむす紅さ。赤煉瓦を碎きし如き土の色。其土の緑に縁とられたる道を、頭に白布腰に色あるサロンを巻ける黒條々の男が、角いかめしく眼柔和なる灰色の水牛にバイナップル積みし車ひかせて驅り來るも興あり。植物園は、實れる芭蕉、實れる

椰樹、マンゴ樹、旅人扇、木性羊齒、蘭科植物、叢竹、睡蓮など、折から雨後の緋黄紅紫燃へ爛れ、葉は緑の焔を滴し、栗鼠は木傳ひ、何處の童が鉦たゝくぞと見れば人無くてカン／＼の音は露の草にあり。天然の大温室、脳は眼と共に疲れむとす。翌再び上陸。不幸なる我姉妹の住むさまを見る。生ける死骸の三々五々、青塗の家の前に、同胞を見かけて、平氣らしく談笑するが中に、十二三の兒、轆に駒下駄なるあり。見るに忍びず。

卑南

廿五日、夕新嘉坡發。廿七日午前卑南着。翌午後解纜。コロムボまで二十餘名の甲板船客あり。皆印度人。持參の寢臺に臥し英語を操つるクリスチアンの讀書子もあれば、牛糞を額に塗り耳に腕に足に金環を飾れる婦人もあり、芭蕉葉にカレーライスを盛り、手づかみに食ふもあり。

印度洋

卑南を出で、印度洋、浪なくして日々穩やかなる航海をつゞく。

四月三十日、東京は凱旋大觀兵式の日なりとて、三等客にも五目めしの饗あり。夜は風涼しき二等の甲板にて蓄音機言ひ、ホテル研究に歐洲に行く人琵琶歌「臺灣入」を歌ふ。

大洋の一日は今日も昨の如し。海には飛魚、海豚、水鳥、稀に船。天には朝日、夕日、水より出で水に入る。さはるものなき大空に雲のたはふれ殊にめでたし。海天の一

角に濃鼠の雲起りて、刷毛もてさつと夕立の一つら、行衛は見へて我船に寄らで過ぎ行くは遺憾多し。

五月二日、日入りて西の空冷やかなる檸檬の黄になり、錫崙の嶋の上に濃き藍色の雲一條、其下より白毫を欺く長庚の光さやかに、心頻に釋尊を思ふ。

古崙母

五月三日、古崙母着。

カンデーには行かず。熱帯の名残に、同室の諸君と馬車

にて近郊を走らせしのみ。

五月五日、涼風の夕、古崙母拔錨。

月の海

古崙母を出でて印度洋いよく穩やかなり。

五日は十五夜なり。海静かに、風ソヨギて、寝ぬるに惜

しき月夜。舷に倚りて見渡せば、月の海原しろくと、

天地の界は消へぬ。「道通天地有形外」と云ふ古人の句も

思ひ出でられて、

限りなく行かばや行かん久方の

空に通へる月の海原

十六夜も好かりき。十七夜も好かりき。
あゝ忘れ難き印度洋の月夜。

船中雜興

古崙母より坡西土までは二週日の長丁場。甲板球突、ク
リツケット、擊劔、碁、將碁日々盛なり。甲板に狎あり、
猫あり、盆栽あり。洗濯屋シャツを曝らし、素人床屋剪

を鳴らす。船は即ち一家也。

航海中の快。

早天祈禱、海より日の生るゝを見る。

素足になりて濡れたる甲板を歩む。

日ざかりの海水浴。

冷蔵庫に入れしバインアップルを食ふ。熱帯菓物は皆熱
帯臭味あり。生温にして質濃し。バナナの甘きも墜き易
し。バインアップルを以て余は第一とす。新嘉坡の海岸
通並木の蔭に支那人の賣るバインを同行四人立食したる
味は忘れず。

浴衣にて跋扈する。此は日本船にして殊に三等の恩惠也。新嘉坡までは船房に臥しぬ。コロムボ迄は人無き三等の廣きを擇みて臥しぬ。コロムボよりは常住起臥甲板に於てし、三食も甲板に於てす。快活甚し。米の飯。特別三等も洋食。余は肉を食はず、毎食パン二片馬鈴薯二個、多く同室の諸君と肉薯の交換をなしぬ。其も坡西土へ二日と云ふ頃より急に咽喉を通らずなりしも可笑し。稀に日本食とあれば欣然。同室の塊人R君常にボーイに曰ふ、メシ、アリマスカ。マスと云へば、ヒユウと口笛を鳴らす。

荷役の非ンチのガタ／＼やみ、うるさき解去り、我船汽笛を鳴らして徐に港を出づる。

不快。

盗汗。イクゼーマ。パンのふるき。

十錢二十錢の爲に黒き小兒の甲板より水面に飛び、甚しきは六千噸の備後丸を舷より舷に潜るは、馴れたるわざとは云へ、見るに嬉しからず。

何れの港も同様なれど、古崙母の解船頭などの、折から歸還兵を載せて浦鹽より來れる露國船を指して、日本はエライ、露西亞はツマラス、露西亞人皆死ンダ、と片腹

いたきお世辭を云いつゝ、即ち辭賃を食れる。
 上海なり、香港なり、新嘉坡なり、卑南なり、古崙母な
 り、通貨一々に異なりて兩替の煩あり。同じ英領に於て
 すら郵券だに一ならず。世界の公道を通りて、愚極まる
 不便を忍ぶ。唯是れ一地球、十四億の人間、垣に墻し、
 恬として怪まず。これ何たる話ぞ。
 君の鳥はドウダ、僕の鳥はアカンなど云ひ合ふボーイ君
 等の話を聞けば、知らず誰か彼等をして斯くの如くなら
 しめたる。

百二十度内外の機關室に一直四時間乃至二時間の勞働す

る機關士、火夫を見れば、甲板の寢椅子に團扇使ひして
 暑しとは贅澤の沙汰也。Fore castle の水火夫室を覗きて、
 彼等が花牌に耽るを見、而して彼等に長たる人の中には
 配下に高利の金を貸して身代を作れる者ありと聞けば、
 知らず誰か彼等の爲に眞の親分となる者ぞ。
 余は船に醫師の乗れる如く、常任牧師の乗る日あらんこ
 とを望む。

船は社會の雛形也。四十五日の船中生活は、余にさまざま
 の問題と暗示とを與へぬ。

紅海

五月十三日、船紅海に入る。

何時となく、微風すら風ぎて、淺緑の海膏を流せる如くなりぬ。海口に島あり、島に燈臺あり、赤黝き岩と砂利の裸嶋、一草の緑も見へず、燈臺守は何を飲みて暮すぞ、見るから咽喉焦きぬ。亞刺比亞の方を見れば、赭裸の山を壓して、熱砂の吐くなる白銅色の雲の峰むらくと天を衝く。印度洋の長庚に釋尊を思いし余は、此雲の峯に對して、不穩の預言者マホメツトを想起するを禁じ得ざりし。

蘇士運河

五月十七日、起き出でて、右舷にシナイ山を見る。朝日を負ふて、碧染むるが如く、人を嚇する峻峭の面目を見ずしてやみぬ。

此夕蘇士着。嚴重なる檢疫の後、船は探海燈を點じ、微速力にて運河に入る。右舷の漣は亞細亞の沙を洗ひ、左舷のうねりは亞弗利加の岸を舐む。兩岸に蟲聲あり。

二十八
十八日、運河の中にして夜明けぬ。兩岸の沙漠、茫茫たり。午近く烈風砂を捲いて天地昏々。駱駝を埋め人を葬る砂あらしとは此なるべし。戸を密閉するも、満室砂になりぬ。

左様なら備後丸

運河北に盡きて海と潤がる處、砂の上に建てられたる坡西土。午後三時着。余は同室の塙人君と船を下る。

四十五日の航海も果てぬ。左様なら備後丸。爾の健康を祈る。

埃及瞥見

カイロへ

五月十八日、午後四時坡西土上陸。新嘉坡以來蒲むしろ一枚敷きて板の上に寝馴れたれば、此夜ホテルの床あまり柔らかにして却つて寐られざりし。十九日、パレスタイン行の汽船に兩三日の間あり、埃及を覗かむと、R君に別れて正午カイロ行の汽車に乗る。

沿道所見

汽車はイスメリアまで蘇士運河に沿ふて逆戻りす。緒き砂、アレツポ松、名を知らぬ灌木、停車場には莢竹桃の花紅に、霸王樹の花黄なるを見るのみ。三等室内は何處も同じ。乗客は土耳其帽に歐服の開けたるあり、頭に布を巻き筒袖の着流し鞆なしの皮沓なるあり、黒き覆面を小鼻の所にて金屬の管もて婦人のどめたるは異様にして眼に凄味あり。新聞賣、レモナード賣、

胡瓜賣、毛布賣すら車内に入出入す。

イスメリアより西折して漸く耕地あり。皆砂地。ナイルをひきし灌漑用水の流あり。小麦まさに熟す。畑中に矮き櫻欄立ち、水たまりの畔に霸王樹黄花をつけ、駱駝行き、驢馬來る。町も村も唯白つぼき土の家、見るに熟し。午後五時カイロ着。坡西土より五時間。

カイロの夕

今のカイロは西にナイルの長江を帯び、南東モカダム丘

に據り、人口約六十萬、外人四萬を算す。余は宿引の誘ふまに、公園近き安宿に投ず。やがて案内者と出で、カイロの夕を見る。

耳にマダム、モツシユの奏樂を聞きつ、埃及のハイカラがタウラ(土耳其双六、賽二個をふる)の勝負する巴里うつしのカフェ、冬季避寒旅行の盛には六百の室皆塞がると云ふ王宮を欺くセツアルド、ホテル、此に劣らぬニウ、カンチネンタル、ホテルなど、市の新しき歐化したる部分は見るに興なし。マスキ、バザルに入る。此處は狭き巷に物店ひしと並びて、芋を洗ふ人中を、飾りの真鍮錢ちやらく

蹄憂々荷つけ驢馬に白髯の翁のうち乗りて歩ませ來る、
四足の跡しるき革囊に水盛りて素足の小供の背負ひ行く、
看板に「アリババ」バラバの名を書けば、伴をつれたる覆面
婦人の黒き眼を光らしてねり行く、店に出したる波斯絨
氈の賑やかなる色も、頸に桶つるしたる飲料賣の黄なる
ふれ聲も、一つになつてつき初めたる洋燈の光にゆらめ
き、何時しか身はアラビアン、ナイトの市場を歩む。

此がナイル乎

二十日、早朝案内者モスタファ君來る。ピラミッドを見
る約束あればなり。新婚間もなしとて、案内者は爪と掌
を朱に染めたり。ヒン子(鳳仙花か)の花葉もて染むるなり
と。

朝冷かにアカシアの花香る街を馬車にてナイル河に出づ。
鐵橋江を横斷し、人造の獅子左右に橋を鎮す。濁流汪々、
川蒸氣浮び、荷舟帆を張りて上る。此がナイル乎。大洋
に馴れし眼は、隅田川にいくらもまさらじと見ぬ。然も
今は水尤も低き節、而してナイルの面目は素より古多く
自然多く今少なく人少なき今少し上流の邊に求めざるべ

からず。

殺風景の文明

ナイルの本流を渡つて、新設の電車に乗る。一條の鐵路
ナイルに沿ふて南するは、是れやがて亞弗利加を縦貫す
可き鐵道なり。已にゴルドン將軍戰歿の地カアツームに
通すと云ふ。電車の腰掛の背には、亞刺比亞、英、佛三
様に乗客注意をしるす。總じて政治上に英國の埃及も、
社會的には佛蘭西の勢力猶久しく廣く深し。

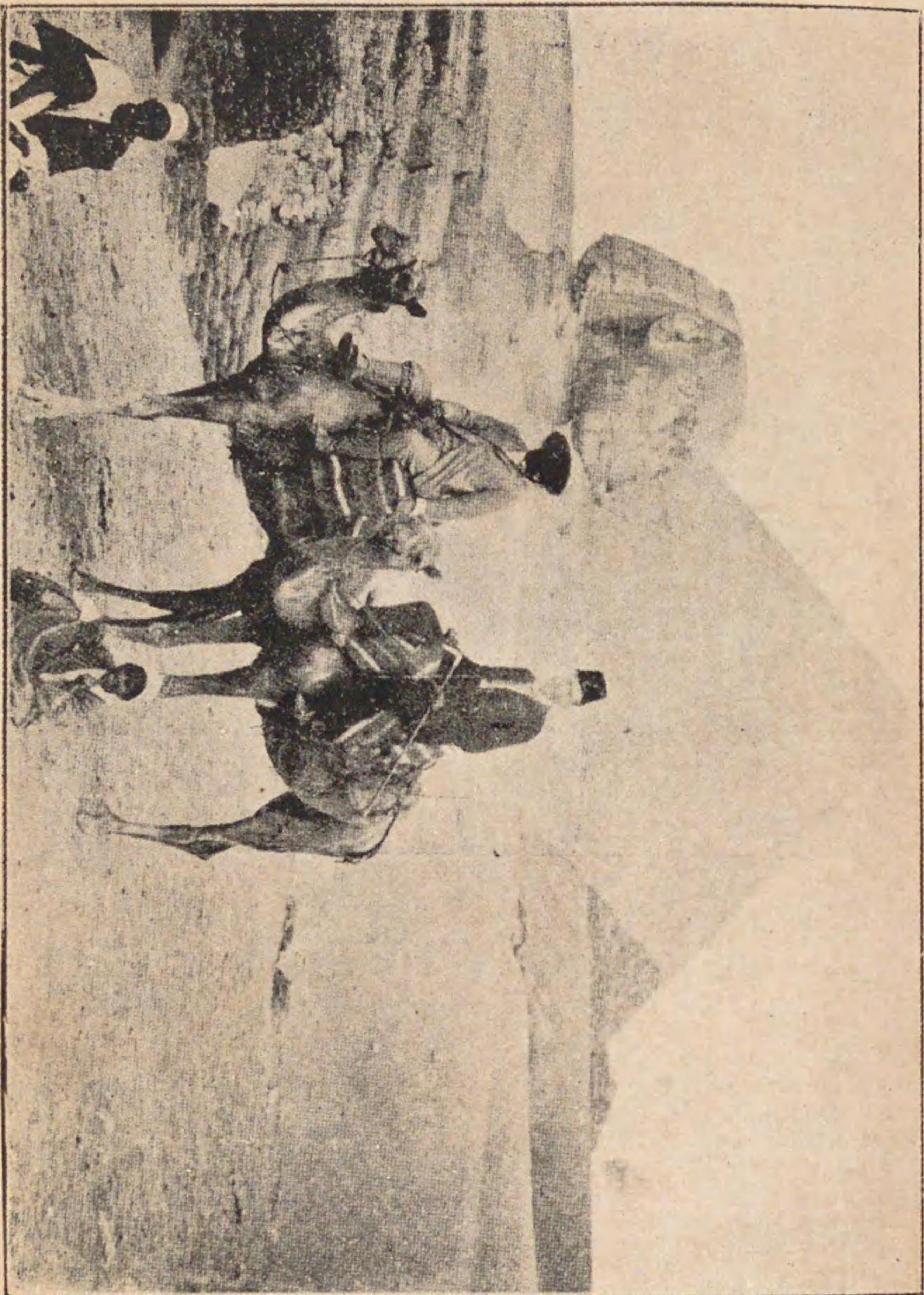
電車は麥黃に野菜青き耕地を貫ぬき、アカシア並木の道
に沿ふて、ピラミッドの立つ丘の直下に到る。ナイル橋
より五十分。

便利を興へて詩を奪ふ文明の蠶食よ。電車を下ればメナ、
ハウス、ホテルあり、寫真屋あり、小郵便局あり。

ピラミッド及スフィンクス

余は丘を上りて、大ピラミッドの前に立つ。約五千年の
昔埃及第四朝の王キオツプス(またクローフ)の建つる所、

高四百五十呎、底の側各七百四十六呎とか。天を上にし、地を下にして、さまで大なりとは見へず。五千年の風雨を閲して稜はやゝつぶれ、四面三角の其面は處々缺げ損じたれど、猶何時までもと云ひ貌なり。少し劣りて一基、更に小さくて一基、外に王族重臣の墓と云ふいと小さきもの數基。數あるピラミッドの中に尤も名高きギザのピラミッド群とは此かどやゝあき足らず思ふ。勧めらるゝまゝに、駱駝に揺られて大ピラミッドを一周し、「スフィンクス」の前を過ぎてこゝに撮影す。駱駝を下りて、しばらく「スフィンクス」と相對す。自然の



大ピラミッド及スフィンクス

岩をきざみてピラミッドより更に古しと云はるゝスフィンクス、人の顔、獅子の身にて永久に砂に匍匐す。馬鹿者の悪戯に射的の的にせられて鼻のあたり缺け損じたるも、曩昔の面目存す。體長一百四十六呎、高さ五十六呎、面の願より頂まで二十八呎半と云へど、此もあたりの漠たる爲にさまで大なりとも思はれず。相對するしばらくにして、石像は宛がらに微笑を帯び來りぬ。人にして獸なる石よ。六千年の縛は永からずや。ナイル音なく漲り、リビアの砂漠墨より黒き夜、電光の二條三條ピラミッドの頂掠めて瞬く間無限の荒寥を照す時、何處ともなく大

欠伸して「未だ乎」ぞ唸る聲聞ゆることあるべし。然なり、未だし、六千年、人は未だ半身獸たるを脱せず。然れど時は來らむ。文化を誇る歐洲北西比利亞の如く氷の野となりてサハラに花咲き香る時、爾砂ふるひして全き人となり立ち上り、足踏みならし「起きよ、解脱の時は來ぬ、白骨醒めよ」ぞピラミッド押し動かすの日ある可し。砂に埋る「スフィンクス」の足下に到り、更に其の肩に攀ち、轉じて發掘されたる墓穴の長一丈、厚四尺もある可き赤花崗石もて堅固に築けるを見、出でて烈々たる日光の中に立つて四顧す。スフィンクス此方にあり、默然、

ピラミッド彼處にあり、深青の空あからさまに立つ淡褐色の大三角、青天白日物象皆明らかに、あまり明らかにあまり靜にして却て無きが如く、畫ならぬものに對して猶吾眼を信ずる能はず。此時先程より附纏ひし「ベドイン」の一人余が服の裾牽き動かし「ミストル、君が爲に運の吉凶を占はむ」と云ひつゝ、砂の上に太陽の形を指もて畫きはじむ。余曰く、否とよ、吉凶を知る者はアルラアのみ。然らばピラミッドへと彼れ先に立つ。

二つの死

四十二

其には及ばじと思へど、一人は余の右手をとり、一人は余の左手をとり、一人は腰を押し、大ピラミッドの東南角よりのぼる。皆堅緻なる石灰石。高さ三尺に超ふるものあり。手をとり、跳つてのぼる。足がかりは十分なり。忽ち一陣の風あり、颯と余が帽を遙かの地上に吹落しぬ。覺へず膽を冷やす。「ベドイン」の一人下りて取る。忽頭上の石に二尺ばかり腹ふくれたる灰色の蛇あり、

蜿蜒す。再び膽を冷やす。此は無毒蛇なりとて、一人手頃の石を拾ふて打殺せば、蛇は今呑みしばかりの蜥蜴を吐きて、死す。吐かれし蜥蜴も己に死せり。これ五千年の帝王の墓の上、眼前優勝劣敗の悲劇、生死一瞬の凄きを見せられて慄然と膚に粟す。半途に小憩して絶頂に到る。二十分を費やしぬ。ピラミットはついに大也。人の手にてつくられし墓の中斯程大なるはあらず。而して徒勞なるかな。

四十三

古今の大墓地

絶頂は約百坪の平面なり。額の汗を拭き、石に踞して眺む。

東は生の王国。埃及の生の親なるナイルは今も何千何萬年の昔の如く汪々として流れ、其兩岸は麥黃に野菜青く櫻欄其處此處に簇生す。カイロ市はナイルの彼岸、モカダム丘の下に白く、綠樹道を挟むで一線我脚下より其處に達す。西は死の帝國。赭白きリビヤの砂漠に波濤どうなる丘の末遠くサハラに通ふ。吾立つピラミッドを中心

として、此砂漠の端一帶は古今に比無き大墓地、附近の幾個ピラミッドを初として、累々たる幾千載の墓、發掘せられたるあり、石の横はるあり。眼の及ぶ所南にはアプシートル群のピラミッドあり。更に遠くサツカラ群のピラミッドあり。眞に是れ死の大帝國。

頂上の石には旅人さまへにおのが姓名を刻めり。余も鉛筆もて書きベドインの小刀してはかなき吾名をピラミッドの上にといぬ。

墓の國

ピラミッドの内部は見ず、電車にて歸る。午後再びモスタファア君とモカタム丘に高きモハメット、アリー回教寺に遊び、ナポレオン一世の贈りしと云ふ大時計を見、カイロ市を俯瞰す。ナイルの彼方にはピラミッドの群遠く立ちて生るカイロを覗く。

蠅と子供の群がる貧民窟を通りて、回教徒の墓地を見る。堀にしきり圓屋根を覆ひし死の殿、据へし墓は皆コランの文句を金字に浮し、頭をメッカの方に向く。金碧燦爛として、一基三十万圓を費やせるものあり、家族の來り憩ふ爲に墓のほとりにソファを設けたるあり。何處までも墓の國也。

メムフェイスの跡見るべきものは山の如くなれど、疲れて行かず。

博物館

二十一日、朝博物館を見る。考古學者の不二寶藏、此處には二千年三千年は青二才のみ。

「神はまた人に永遠を思ふの念をさづけ玉へり」
 疑ふ者は來りて此博物館を見よ。
 此處には石の人あり、木の人あり、金屬の人あり、骨皮
 の人あり、皆不死と無言に叫ぶ。
 駭然とせしは、眞黒き木乃伊の耳に金環の光り居しなり。
 金光燦然として人のぬけ殻を冷晒ふ。
 僧の木乃伊もあり。
 惜むべし皆博物館の不朽也。

古と今

埃及の興味は過去にあり。回々教と似而非なる文明と金
 撒く旅行者に荒されたる今の埃及は香ばしからず。
 斯夕カイロを去つて坡西土に歸る。

エルサレムへ

甲板の喜劇悲劇

五月廿二日午後五時、余は坡西土よりジャファに赴くべく、
埃地利ロイドの汽船アムフイトライト號に乗りぬ。
甲板は猶荷積の騒ぎ。彼方には乗客の一群手拍ち囃して
剽軽なる土耳其漢の手振可笑しく躍れるあり。此方には
老少男女の幾組、男は何れもモミアゲを長くし丸帽をか

ぶり、女は更紗の頬被せるがあり。此は何れも露國を追
拂はれてエルサレムに移住するユダヤ人の家族なりと船
員は語りぬ。
腰かくべき所もなければ、暫く立ちて見る程に、彼ユダ
ヤ人の男子等は八十の翁より七つ八つの子供に到るまで、
一寸立方程なるカメラ様の黒き箱とり出して、黒き革紐
もて一箇は辨慶の兜巾の如く額に、他の兩箇はくるく
と腕にまきつけ、其中の長なるべく見ゆる翁は黒二段筋
の縁とりたる白布の被衣引かぶり、いづれも希伯來語の
舊約書若くは祈禱文なるべし一冊の書を兩手にとりて、

エルサレムの方に向ひて立上り、あたり構はず呻吟くが如く哭くが如き聲にて誦しはじめ、且誦し且拜し、或は頭を左右に打振る。此は彼等が夕の禮拜をなすにて、彼カメラ然たる箱は「テッフィリン」と云ひ、中に細書したる舊約の文句あり、所謂神の戒の詞を身につけをまさしく文義通りに而して文義のみに實行せるなり。憐れむべきかな、曾ては神の選民と誇り、幾多の預言者と果ては基督をすら爾の中より出しながら、爾は活ける信仰を失ひ、十誠の第一を破つて唯金にのみ平伏し、國を失ひ、到る處に辱しめられ、而して千載尙頑としてメシヤを待つと

は何事ぞ。せめては爾が受くる迫害と苦難爾を浄め、爾が中より大なる靈、人となつて再び世に出でよかしと、眼をとめて數多き其小兒を見るに、人形の如く可愛ゆき、イタヅラらしく剽輕なるはあれど、維れイスラエルを負ふて起つべき面魂ある者も見へざりし。荷役濟み、艙の蓋さるゝと齊しく、ユダヤ人も土耳其人もシリア人も争ふて場所を占領し、ユダヤ人はおのゝ大なるズツクの袋に入れし蒲團取り出して引敷き、瞬く間に三等の甲板は早三尺の餘地を殘さず。七時出帆。港口なるレッセップの像も、坡西土隨一なる

運河會社の大建物も遙かのあとになりて、日暮れぬ。地中海の夜風寒し。余は辛ふして甲板の上水火夫の通路に海老形になるべき吾領地を拓き、毛布かぶりて星光の下に眠る。

廿四時間の檢疫

廿三日、朝八時ジャプア着。地中海の碧に映つる一帯の赭き沙丘、丘の上より濱かけて赭き黄なる白き家の高低参差と立ならびたる、此れ昔吾儘つ子の預言者ヨナが逃

げ、基門の子路なるペテロが異象を見しヨツバのあとなり。いで上陸と支度するに、思ひもかけぬ二十四時間の檢疫あり。

三等客一同舟にて隔離所に上陸。舟着き悪き濱の淺瀬を、人は舟子に負はるれど、猶太人は靴、鞆ぬぎ、ずぼんかけらげてざぶく、渉る。隔離所にて着衣携帶品一切消毒せられ、人は裸になりて驟雨浴せしめられ、ほつと一息つけば午になりぬ。三等には賄なし、客は皆パン卵胡瓜茶など用意し居るも、余は不覺にも其用意なく、思ひかけぬ檢疫に出會したれば、今朝より劇しき空腹に殆んど眼

もくらみて、まさに屋根の上のペテロとなりぬ。不圖隔離所の近くに出小屋あり、物賣るを見つけて、急ぎ行くに、小屋の内より手を振りて来るなど云ふものゝ如し。訝りしが、漸く曉りて、打笑ひつゝ、中程にありし石の上に若干錢を置けば、小屋の中より人出で來りて錢と引換へに胡瓜數本、黒パンの大塊、キタなきチース一片を持ち來て石の上に置き、逃ぐるが如く去れるも可笑し。やがて船に歸る。

埃及に入りて有名なるバクシーシ(心づけ)の語を耳にせしが、パレンスタインのあるじの土耳其人が遠來の客を歓迎

の第一語は此「バクシーシ」なりし。檢疫係が船に來て荷物の消毒を始めし時、團栗眼にナポレオン三世髯、頸に眞鍮の三日月形の役目のフダをさげし下まわりの一人竊と余を引のけて、行李の中には大切なる御衣裳類もあるべし、石炭酸かけるも御氣の毒なれば云々、終に幾フランクをせびりて、上役に向ひ、此荷物は濟みて候と片寄せぬ。ユダヤ人の連中も片隅に長々しき交渉の結果幾干か搾られしさまなり。

眼前に聖地の玄關を控へつゝ、斯る不快心の出來事と、積荷の上げ下ろしの騒ぎに悶々とせし余も、思ひ返へせ

ば眼前の人と事とに興は湧きて、今日も朝夕の勤行怠らぬユダヤ人、錢を興へし人の手を小兒に接吻させし母親氣質、蓄音機を取かこみて陽氣に騒ぐ土耳其人などにさままの事の思ひつゝ、腹空けば胡瓜を噛り、日暮るれば逸早く毛布敷きてまた甲板にまろび寝の夢を結ぶ。

上陸

二十四日、朝八時半愈上陸。旅券係の豚の如く肥へたる土耳其帽の翁、余の旅券を見るより「お、貴君は日本人」

と相好崩したるはよけれど、税關の混雑と蛇の如くたかり来る宿引に避易し、匆々に馬車にて石だらけなるジャファの隘巷をのぼり、エルサレムホテルに着きて憩ふ程に、今年一月エルサレムに遊びて歸りし山田寅之助君よりにかねて聞き置きしエルサレムなる橄欖館の主人ヘンスマン君が恰も所用にて此處にあるに會ひぬ。またユダヤ人の爲に働き居る英國宣教師某に邂逅す。時間あれど、皮なめしシモンの家なるものは見る氣にもならず。午後二時エルサレム行の瀛車に乗る。佛人の經營せしもの、順禮旅客の尤も入込む降誕祭、復活祭の頃は別とし

て、今は一日に着発おのく一回のみ。上下唯二等、機關車を合せて五臺の列車。同室の客にはさきのユダヤ人の内一組、シリヤ商人、寛濶としたる僧衣に紐の帶銀の十字架をブラ下げ珠數を爪繰る天主教僧侶、白ボンネットに黒服の尼など。

一路の所見

ジャファを發して、汽車はしばらく高き砂地の菓樹園を通過す。黄なる花咲く霸王樹の生籬に取こめられし密柑、

檸檬、無花果、柘榴、杏、葡萄、橄欖、いづれもよく培はれて澤々と茂れり。やゝにして麥圃、丘の上まで一面に色づきて夏近き空に映る。ユダヤの山々も青く見へ初めぬ。鶴の鳥の五六百羽も群がりて悠々とあさり居るは珍らし。

此あたりは所謂シャロンの野。三月四月野花の榮は過ぎたれど、野生の姫芥子、ツユ葵、矢車草などは麥にまじり鐵路の縁をかざり、羊稀に石どころくなる野の牧に人參に似たる草の白に黄に敷けるが如く咲きたるも美しく。リツダ(ルツダ)、使徒行傳九の三十二等にて、村の小

供が桑實を賣りに來しより、八つ七つの昔故郷の桑圃に
 手も口も紫にせし事を思ひ出で、其一籃を求めて絶て久
 しき甘さに口も手も紫に染めぬ。

二時間ばかりにして瀛車は山間に分け入る。山に石あり、
 谿に水無し。小き停車場いくつか過ぎて、始終山の峽を
 縫ふて上り來し瀛車は漸くや、うち開けたる所に出でぬ。
 石だらけの山畑に橄欖の樹あり、野菜あり、其處此處の
 高みには立派なる建物あり、うねりて通ふ大路には馬車
 自轉車あり、日傘の婦人は野花を摘みて草に座し、學校
 の小兒らしきは我瀛車を見かけて喝采す。此處は何處ぞ。

狐に誑されたる如くして、身は何時しかエルサレム郭外
 の停車場にあり。

エルサレム及附近の十二日

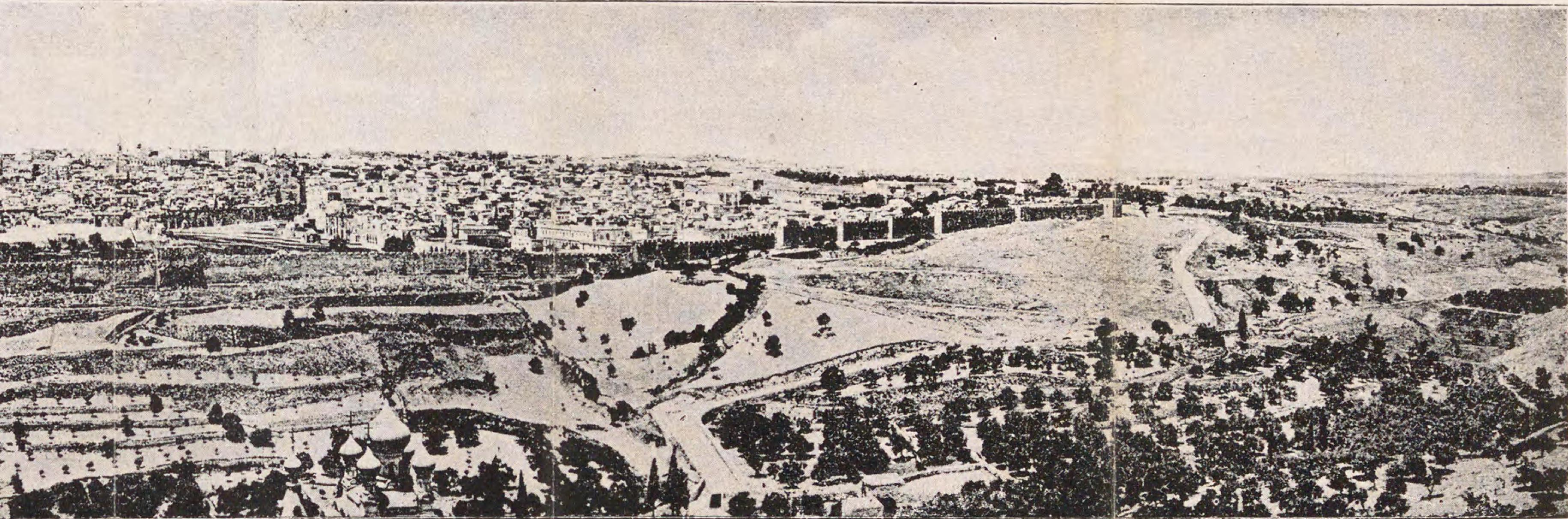
第一夜

五月廿四日夕六時、ヨツバ(ジャファ)より四時間の汽車は、
 エルサレム城南の停車場に果てぬ。
 左に焦茶ズツクの旅袋、右に同じ革囊のふるびたるを提
 げ、洋傘と新嘉坡仕入のステッキを小脇に挟み、髪髯蓬
 々と垢つきよごれたる東方順禮の客を、迎へに來居し楸

門パツヨ

門コスマダ

(?) タゴルゴ



門金寺ネマセツダ立露

門ノパテス

門テロヘ

東

橄欖山より見たる今のエルサレム

六

げ、洋傘と新嘉坡仕入のステッキを小脇に挟み、髪髯蓬々
 と垢つきよごれたる東方順禮の客を、迎へに來居し橄

聖

不淨門

シオン門

ヨツパ門



ケデロンの谷

モスク、オザ、マラ (神殿の跡)

金門

露立ゲセマネ寺

ステパノ門

東

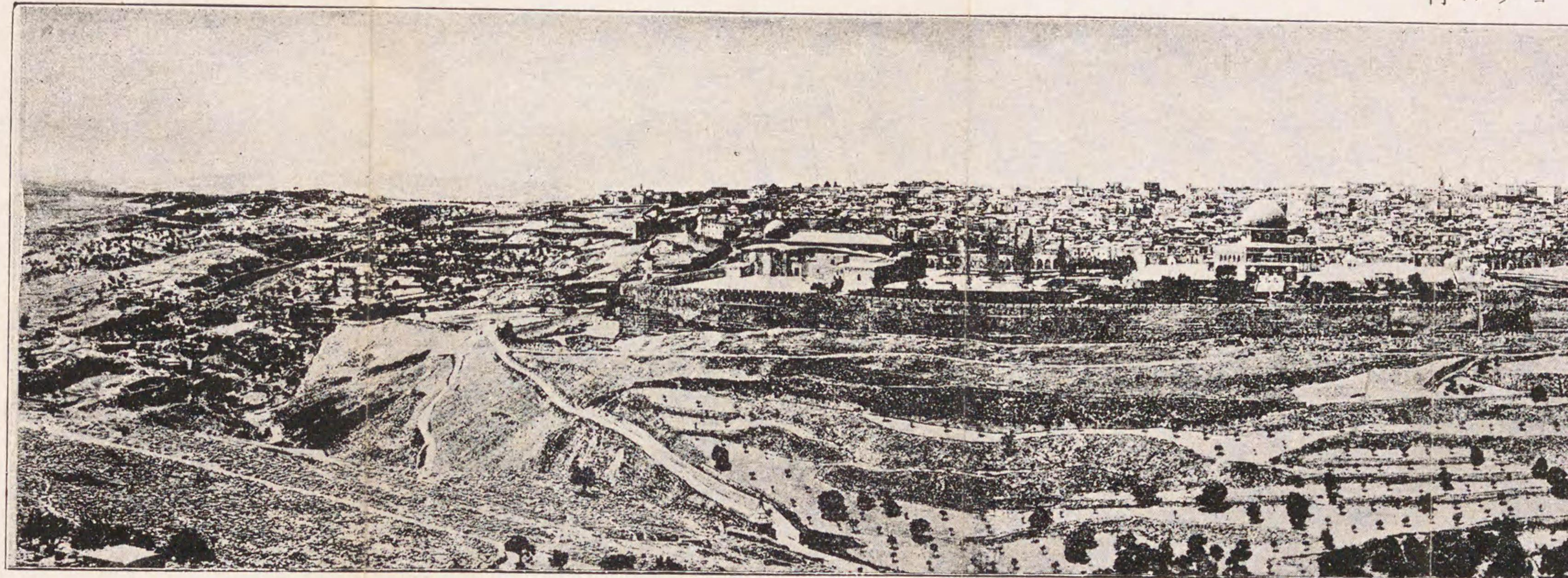
星

門 パ ツ ヨ

門 シ オ シ

門 浄 不

← ン ヌ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ



南
谷のムノシヒ

門 金

(跡の殿神) ルマーオ、ウオ、クスモ

谷のシロデケ

← ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ

櫓館らんくわんのひと人ひと込こみの中なかに見み出いし得えざりしも宜うべなり。馬車ばしやを
 雇やとふて已すまに打うち乗のりし所ところに、行ゆ先さきを聞ききて馭ぎよ者しやふりかへり
 何事なにごとをか叫さけべば、一ひとり人ひとの若わかき歐お洲しゅう紳しん士し遠あはてしく來きたりて、余よ
 を其馬車そのばしやへと請しやうず。此こは館主人くわんしゆじんの甥おひ口くち波は爾にト君くんにて、馬
 車しやに白しろき日ひ傘がささしたる肥ひ大たい婦ふ人じんの乗のれるを客かくかと思おもへば
 主婦しゆふなりき。

傾かたぶく夕ゆふ日ひに白塵しろほこりた立たつ大おほ路ぢを、馬車ばしやは爪つま尖さき上あがりに走はせ行ゆく。
 エルサレム城じやうの西せい側そくを北きたへと走はしるなり。路ろ傍ばうより直たち
 三丈じやうばかり聳そびへ起おこる城壁じやうへきの茶色ちやいろにふるびたるが、シオン
 山さんの城壁じやうへきなりと口くち波は爾にト君くん教をふ。石垣いしがきの間あひだに芥子けしの花はな赤あか

く、新しく植へたる土堤の橄欖は塵を浴びて白し。やがて高き櫓砦あり、此はダビデの櫓と云ひて、大部分はヘロデ以來のものなりとぞ。エルサレムの第一瞥一向に際立たずして何となく勝手が違るたるに眼をしばたゝきつ、ヨツバ門を右に見て、城の西北郭外露國居留地に近き橄欖館に着く。十二月の降誕祭に始まり四月の復活祭を絶頂とする旅客順禮輻輳の時節は過ぎて、今は館の逗留客も十二三名に過ぎず。

此夜十時、燭を消して寢に入らんとす。是れエルサレムの第一夜、感謝の祈より起ちて窓の外を仰げば、水の如

き空に星爛々ど、千九百年の昔もまさに斯りしなるべし。

エリコへ

五月廿五日。昨夜エリコへ行く客ありとて同伴を勧められ、早朝起きて三頭立のガタ馬車にて橄欖館を出づ。同行は、亞弗利加ザンジバルに六年傳道し今英國へ歸省の途にある壯年宣教師マツケー君。今一人はザンジバルの土人にして、中央亞弗利加に傳道師たるアブラ君。君は純黒色厚唇にして頭髮ちゞれ、壯年にして英語をよく

す、余と同じく聖地一覽の爲に來れるなりと。マツケー
君戯れて曰く、亞弗利加、亞細亞、歐羅巴一車の内にあ
り、セム、ハム、ヤペテの代表者同乗すと。馭者はシリ
ア人、外にベドイン一名、短銃を腰にし、騎馬にて同行
す。エリコ方面猶護衛の要あるが爲なり。

ダマスコ門を右に見て、城北を一匝し、東に折れてケデ
ロンの谷に下れば、右にエルサレム東側の城壁を高く見
上げ、左は即ち橄欖山、橄欖の樹は疎らにして多きもの
は石、頂上半腹點々として寺院僧庵を見る。山麓路傍堀
を繞らし、柏楨類の茂れる一區は羅甸派のゲツセマ子な

りとマツケー君教ふ。君は逗留十日に及び、よく此邊の
案内を知る。道は數多き古今の墓を右に見て橄欖山の南
の肩を這ひのぼり、見晴しよき垣なる岨を行くことしば
らくにして、白き土の家石の家三二十あり。ベタニヤな
り。見物は歸途に譲り、馬車はひた走りに走る。

石灰岩の山、石ころ路、山に緑なく、水聲なく、矮生の
芥子、矢車、薊類の稀に岩根石間を綴り、鱈の子然たる
鼠色の蜥蜴の馬蹄に驚きて隠るゝのみ。使徒泉の茶
小屋を過ぎては、下り勝なる路はいよゝ荒寥として、
稀に會ふ驢馬の土人は銃を負ひ、唯一つ行き逢ひし旅人

の馬車には長鎗を把れる騎馬の護衛引添ふたり。基督の
 よきサマリヤ人の譬喩も思ひ合はさる。果して、半途の
 尤も淋しきあたりに「善サマリヤ人亭」と云ふ茶屋あり。馬
 は一息入れてまた走る。
 山開けて死海はの見ゆるあたりにて、馬車を下りて、宛
 ながらダンテの淨罪界中のものなる口を開ける大壑の底
 にしかみつける精舎を俯瞰す。此は希臘派の庵寺にて、
 古來罪ある僧侶の籠る所と傳ふ。また馬車に上りて走る
 ことしばらく、ヨルダンの谷と死海と残りなく眼下に現
 はる。

エリコの谷

これエルサレムより低きこと約三千七百呎、地中海面よ
 り下ること約一千二百呎、世界に類なき窪地なり。最後
 の坂危険なればと馭者が云ふまゝに、徒歩下らむとして
 しばし坂上に佇む。
 静かに明らかに寂しき眺かな。立のぼる一條の碧き煙な
 くば、誰か書ならずと云べき。赭禿げし彼方の山まで近
 くは見ふれど少なくとも三里はあるべし、其を向ふの限り

として南に死海を曳ける一帯ヨルダンの谷、植物の青黒
き筋にヨルダンの流は隠れ、谷の土弓形に盡くる所に死
海の碧き水は顯はれ、ポプラルの小さくしるきあたり香
爐大のエリコの人家片手に數ふ可し。寂しきかな。こゝ
に史ありて五千年、ソドムゴモラ何處にかありし、アブ
ラハムロト何處にか行きし、ヨシユアラハブ何處にか逝
きし、そもザカリヤの子とマリアの子と何處にか往きし、
山あり水あり悠々たる蒼天、人の子をして悲哀の重荷に
堪へざらしむ。

馬車はとく坂を下りて待てり。余等もつゞいて下り、ま
た車に上る。漸く小川の流あり。漸く灌木の叢あり。昔
の水道の下を潜り、今のエリコの寂寥たる村に入り、ヨ
ルダンホテルに投ず。エルサレムより馬車下り路にして
三時間。
谷の日熱して紅海を思ふ。午餐、午睡、少しく日の涼し
くなるを待つ。

死海

午后二時、起されて、また馬車に上る。村を出離れて、

灌木荆棘のまばらなる中を下るともなく下り行けば、植
物漸く稀に、やがて乾ける淤泥となり、所々地皮に白き
結晶を見る。エリコより約一時間にして死海の北の濱に
下り立つ。

砂利を踏みて、浪打際に立ちて眺む。東西は三里、南岸
は靄ありて見えねど十里左右なるべし。太古には水面地
中海より百呎も高かりしが、今は千三百呎も低くなりて、
太古の水際半腹に露はなる二三千呎の赭禿の山東西より
岬角又岬角を出して死海を封ず。水深千三百呎とか。不
透明なる黄緑色の水トロリとして、味へば太しく鹹く苦

く、手を洗へば著しく粘氣あり。水上に一帆影あるを見
ず、水中に一生物なしと聞く。アブラ君アブラメに似
たる小魚の死したるを拾ひて不審顔なり。マツケー君曰
く、其はヨルダン川より迷ひ入りし魚の死海に死したる
なりと。げにも死海よ。見る眼にはむしろ美しく、思
へば恐ろし。一日に約六百五十萬噸の淡水を吸ふて殆ん
ど之を蒸發し盡し、礦物質のみまさり行くロトの海よ。
生命なき水、生命を殺す海よ。天の恵を私し犯せる罪の
重なるどころ、人の心に死海あらん、國民の歴史にも斯
死海あらん、イスラエル民族を思へ、恐ろしと見る程に、

風少し立ちて水面騒ぎ、油の如き波は來りて吾爪尖を嘗めぬ。

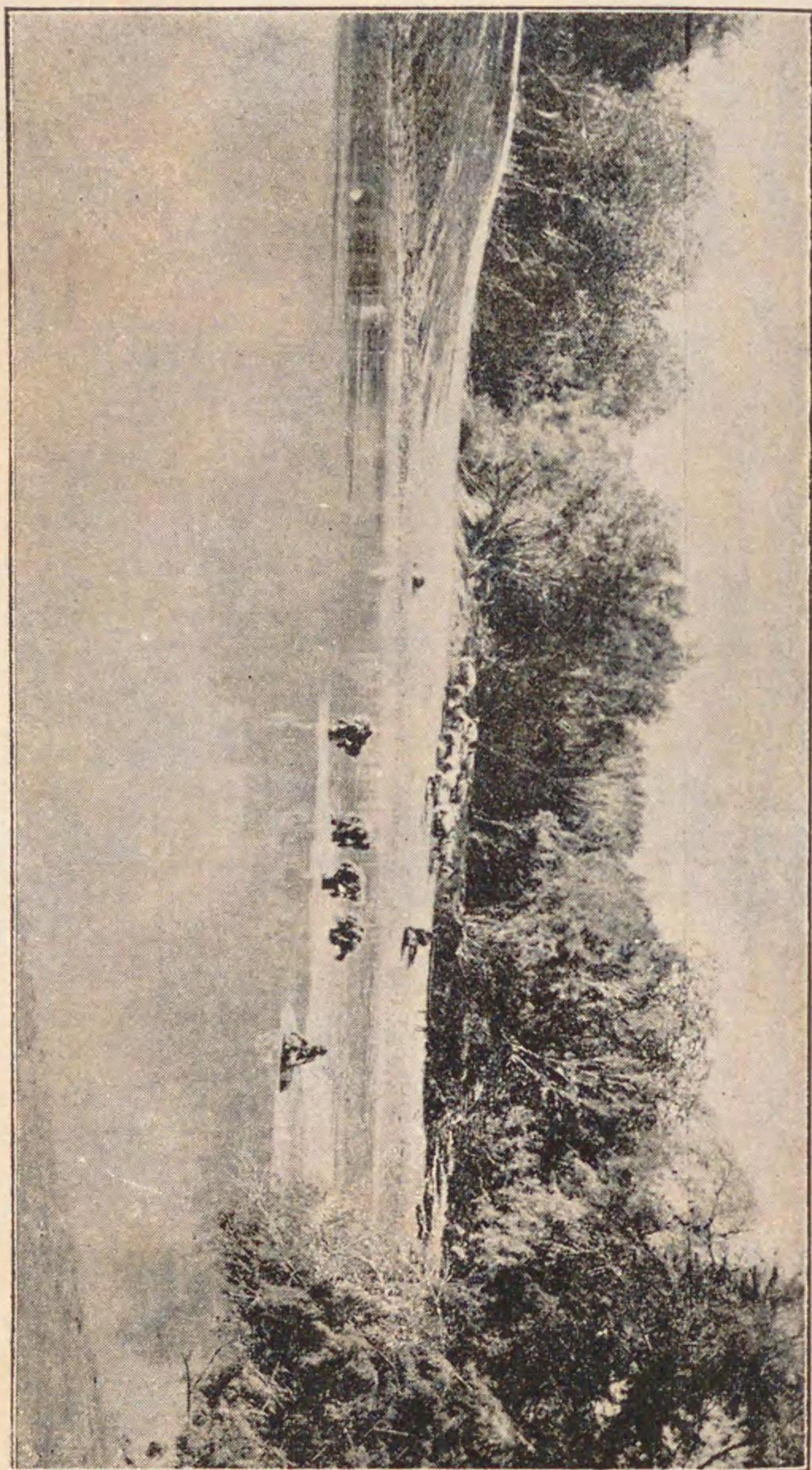
猶行みて四方を望む。東一帶の山、其奥にモーゼが最後の一瞥を迦南にゆるされしと傳ふるネボの山はあるなるべし。西岸一帶の山は、ユダヤの野につらく、基督の四日夜岩上に元座して出陣の覺悟を定められしも恐らく此方角にあるべし。古今幾千載、死海の谷も人間さまざまの變を閱し、一時はこゝに殆んど人の跡を絶ちしこともあれど、ホルマン、ホントが Scapegoat の背景を寫生せしより五十年、今はこゝに轍の跡も通ひて、濱には葭葦の

あばら屋ながら一軒の小家あり、鶏を飼ひ、ヨルダン川に漁るべく一張の網を曝しぬ。

ヨルダン川

死海よりまた馬車に上り、淤泥、漸くにして草、灌木、名を知らぬ木の茂れる林、所擇まず駐くること約三十分にして、馬車は唯有る溝川と思ひぬの岸にとまりぬ。

此がヨルダンの渡に候と馭者は案内す。二十間に過ぎじと見ゆる濁流、くの字を書き、泡なして



河
く
が
ル
ヨ

流る。對岸には接骨木めきたる木黄白き花を冠りて水に
俯き、楊類の雜木と長大なる葎と風にそよぎ、泥深き此
方の岸には葦の根蔓延り、檉柳様の針葉樹、ポプラルな
ご叢生し、上流林梢開けたる所に向山の崖見へたり。「生
命の水」に聯想するヨルダン川は此乎。ヨハチが施しキリ
ストが受けし洗禮の水は、此濁川の水なりし乎。問へば
傳説の受洗は此處にて、エルサレム順禮の來り浴するも
此處に候と、馭者はつい傍なる二つのあばら屋に物の屑
など散らせるを指しぬ。

アブダラ君は氣早く着物脱ぎ棄て、黒條々の身を跳らし

て河に飛び込み、彼岸に涵ぎつきて、蔑など手折りつゝ、
あり。マツケー君はポケットより小さき瓶取出して土
産にヨルダンの水を汲む。余は黙然として濁れる水の流
を見る。

水言はず、彼岸の葦はしきりに風に動かさる。「爾何もの
を求め、何を見んとてヨルダンに來りしや、眼を開け、
眼を開け」と余に向つて語る。

あゝ余は實に盲目也。美を色相に求めて、皮下一寸にだ
に及ぶ能はず。淺薄真に耻べきかな。願はくは斯眼の膜
を截りて、眩して盲すともよし、願はくは爾が蔽なき光

の美を見せしめ玉へ。

余は河水に手すゝぎて立上りぬ。水は音なく流れ、葦はしきりに頷く。

十分の後、呼ばれてまた馬車に上る。

一鞭、川は隠れぬ。其囁は耳に残る。

ヨルダンよ、永久に流れよ。

夕日、夕月、白き夜

ヨルダンの今の河床よりエリコへは二つばかり段層を上

りて行くなり。石ころ地に灌木の叢點々し、車の下より

蠡斯飛ぶ。馭者は夕日に鞭をあげ、十二の石塚をヨシユ

アが建てしギルガルは彼處に候と北を指しぬ。谷には希

臘派羅旬派の精舎ありて、荒寥を領す。一人の行者遠く

寺を離れ、頭を低れて夕日に歩むを見る。エツセ子の徒

の昔を想ふ。

一時間ならずしてエリコの村に入る。入氣少き村ながら、

路傍の細流耳を洗ふて、草木の緑眼を喜ばしむ。温帯准

熱帯の植物よく繁茂する所にて、ポプラル、桑、莢竹桃

は満樹の花、芭蕉實り、葡萄石榴も果已に肥へたり。昔

は棕櫚の邑と名に負ひし其棕櫚は今稀に見る。昔のエリ
コは更に山近かりしなるべし、其跡と云ふものを見て、
やがてヨルダンホテルに歸る。

暑き日は漸く夕となりぬ。庭の卓子に倚りて手紙など認
む。小石鋪きたる庭の真中にシカモールの大木あり、鶏
の一族下にあさる。斯は余が生國の方言「タブ」と云ひ、無
花果に似たる小果ヒシと枝を擁す。ザアカイが基督を見
むと攀ち上りし木若シカモールならば、桑にはあらで斯
る木なりけんなど思ふ。後園にはエニシダ、細き男竹、
薔薇など植へたり。晩涼動きて庭のシカモール黒く暮れ

ぬ。頭を上ぐれば、紺青の空をなでてそよぐ丈高き霞の
葉末に、金鉤の如き弦月、明星を伴ひて出でたり。アブ
ダラ君手を拍つて曰く、新月、新月、エルサレムの空に
新月と。

晚餐。就寢。

蚯蚓鳴きて、ほの白きエリコの夜。何處かに銃聲の
一つ聞へし後は、無限の寂寥に復りて、醒むるが如く、眠
るが如く、身は久しく夢現の境にあり。
惜む可し、詩なくしてすぐる此白きエリコの一
夜。

ベタニヤの今古

廿六日。四時馬車に上る。

谷を出ぬけて、昨日徒歩せし阪を上り果てし頃、東の空朱に明るみ来るよと見るがうちに、瞬く間もなく光芒天を衝て碧きヨルダンの向ふ山より朝日爛々と跳り出でぬ。谷には猶靄あり。死海も眠る。谷底には夜すがら焚きし牧者のかゝりの火赤く煙碧し。夜は谷に残り、山は已に醒む。あゝ雄々しく美しき朝日よ。十字架に突貫す可く

驚く弟子の真先に立つてガリラヤよりエリコへ來玉ひし基督の、エリコを立つてエルサレムに向ひ玉ふ門出の顔こそ斯くはありつらめ。

上りは勞する馬の足をやゝ久しく善サマリヤ人亭に休めて、八時ベタニヤに下る。

橄欖山の東南の肩、エリコ街道に沿ふて南向き、次第高に白き土石の家二三十、無花果橄欖の埃だらけなるを其處此處に點したるが今のベタニヤなり。鍵持つ老婆にあけて貰ひて、マルタマリヤの家と稱するものを見る。粗造なる土石の家、屋根は失せて、其内に柘榴花さき、姫

芥子なごくさくくの野花しほらしく咲きたり。程近きラザロの墓と云ふものも見る。蠟燭を手にして地中の石段を下る二丈あまり、墓は墓ならん。凡そ斯るものに今更眞偽の詮索は野暮なるべし。暫く立ちてあたり見廻はす。エルサレムの方は山角に遮られて見へざれど、南は開けてベテレヘムの方角よりユダヤの荒野の山又山は濤の永久にうねるが如し。なつかしきベタニヤ。山一重谷一つ彼方のエルサレムの頑固無残に引易へて、ベタニヤよ爾は幾度か「人の子」に枕す可き家を興へぬ。立集ふ今の村人に、マルタマリヤの清げな

るは見へざれど、平たき屋根に犬眠り、牝鶏は今も雛をあつめ、子供は指を啣へて立ち、老媪老翁惘々然として遠來の客を見る。ベタニヤよ、爾の名はマルタマリヤと共に世のあらん限り傳へらる可し。九時、橄欖館に歸る。

今のエルサレム

今のエルサレムは人口約八萬、順禮季節には十萬に上る。六分はユダヤ人、餘は回教徒、歐米人等なり。城の西北

郭外は歐米人、ユダヤ人の新居留地、學校、病院、領事館、會堂、孤兒院、順禮宿など或は群がり或は離れて、地勢と共に高低し、年と共に膨脹す。然も人口の大部分は狭き城内に密集せり。

エルサレムは所謂山の上に建てられたる城也。海拔約二千五百呎、石灰岩の山西北に高く東南に低きシオンの山とモリアの山を一括して地盤とす。西地中海へ三十二哩、東死海へ十四哩、パレスタインを南北に走る山坡の其一に立ちて、東に橄欖山、北にスコバス山など高低や、ひとしき山々を四方に繞らす。詩篇の詩人がエルサレムを

山のかこめる如くエホバも今よりどこしへに其民をかこみたまはんと歌へる如し。要害には東にケデロンの谷、南にピンノムの谷深く、西も見下ろし、攻口は北一方のみ。江戸城の四谷と云ふ所にて、羅馬の帝テトスがエルサレムを攻落したるも此方角よりせしと傳ふ。ダビデンロモン以來三千餘年、イスラエル民族の運命は即ちエルサレムの盛衰、基督の後間もなく一の石をも石の上にくづされずしては残らずなりしより、あとは回教徒と十字軍の手にいくたびか取りつ取られつ、基督の時代を今に語るものは、覆へる天と載せし山、人の手に作られしも

のには石垣の少々残れる位に過ぎず。

今の城壁は概中世以降のものに係る。一周すれば二哩半、

高三十八呎半、櫓三十四、門は東に金門(閉づ)ステパノ

門、北にヘロデ門、ダマスコ門、西北角に新門、西にヨ

ツバ門、南にシオン門、不浄門の八門あり。總面積約二

百十一エークルの内、三十六エークルを占めたる昔の神

殿の跡今回教徒の聖殿所在のや、開豁なる一區を除くの

外、回教徒(東北)猶太人(東南)基督教徒(西北)アルメニヤ人(西

南)の四區に別れし城内は、寺院、會堂、土耳其官衙、兵

營、學校、商店、市場等、尺寸の餘地もなく填塞し、所

々に巷を越へて架したる穹窿を潜る凸凹甚しき鋪石の路
は、上りつ下りつ、折れつ曲りつ、エルサレムを一の迷
宮となし了す。

御墓の寺

ヨルダンより歸れる日の午后、余は案内記をたよりに、

城西唯一の門なるヨツバ門より此迷宮に踏み入りぬ。

先づ御墓の寺を見むと、かねて目じるしをつけ置き

し圓屋根と鐘樓を心あてに濶歩し行けば、早速踏み迷ひ

てダマスコ門に出でぬ。引返へして例の迷宮を上りつ下りつ良久しくさまよひたる後、我を折りて案内を頼み、漸く寺門に入る。

此はコンスタンチン大帝時代の開基にかゝり、幾多の變遷を閲し來つて、多數の舊教徒には大本山と拜まるゝもの、所謂十字架の跡及墓の跡と稱するもの也。蠟燭代一フランクを奉納して、心得顔の案内者があどより狐に誑まれし如く色々不思議なるものを見物す。昔の山と石の洞は金銀大理石などきら／＼しきもの、下に埋没して、唯見る此大なる建物は、手にて作れる美の眩惑と、光に

得堪へぬ闇き幽玄の迷を籠めて、人の靈を甘き眠に誘はむとするを。

圓天井の下に堂あり、堂の奥に小堂あり、這ふが如く低き戸を潜りて、基督の墓なるものを見、白大理石の其蓋を順禮の少女の接吻するを見る。天井より釣りし銀の燈數多きが中に、其幾個は羅甸派、幾個は希臘派、幾個はアルメニヤ派、幾個はコプト派に屬すと案内者は一々説明す。十數名の羅甸派の僧侶が深音に祈禱文を誦しつゝ、墓の方に向ひて右手を口にあげ頭にあげ、環の如くめぐるを見る。アブラハムがイサクを献げんとせし跡なるも

のを見る。アダムの墓と云ふ古きものを見る。世界の中
 心と云ふ點を見る。上に上あり、十幾級の階段をのぼつ
 て、此がカルバリー丘なりと云ふもの、上に、銀の蓋せ
 る十字架の穴なるものを見る。金、銀、寶石、眞鍮、油
 繪、燈と蠟燭の光に唯キラとすする拜壇を見る。下に
 下あり、燭を執つての如き室をいくつか見めぐり、油
 繪の聖母聖徒の闇の中より火光に浮き出づるを見る。裏
 に裏あり、時代と共に建増したる寺つゞきに各派の御堂
 ありて、各自におのが供養をなすを見る。すべて闇きが
 中の見物也。

立戻りてしばし茫然と世界の中心に付む。圓天井を漏る
 外光ほのかに、數知れぬ燈明と蠟燭の光はおのが立つる
 煙に和して寺内の闇にゆらめき、金屬寶石のむら光り、
 畫ける基督、聖母、十一使徒も蠟燭の火にとろくと顯
 はれ隠れ、祈禱讀誦の聲は單調なる波の音を寺内に満た
 す。引入れらるゝ如く吾魂幽玄の井深く落ちむとする時、
 寺も碎けし音して物天井より落ちぬ。愕きて吾に復れば、
 大なる玻璃燈の落ちて微塵に碎けしなり。
 轟然として想ひ出でぬ、羅馬なる淨罪の階段の半にして
 義人は信仰に由て生く可しと天來の一喝を聞きしルーテ

川の昔を。

猶太人の哀傷場

子供に案内頼みて、ユダヤ人の哀傷場を見る。猶太人區の東端、後は家、前は高き石垣に面したる細長き巷路が其れ也。石垣は即ち昔の名残、高九間、横二十六間、下なるが中には一丈四五尺の大石あり。風日に黒める石の面に、希伯來字もてさまざまに猶太人等の情懷祈願を刻す。石の間に多く釘を打込みたるは、心無き石を昔に蘇

れとの意か。草花のさりげなく石垣に咲けるはあはれなり。金曜日の午後、また祭日には、猶太人多く此處に集まりて、昔を偲び、今を歎き、或は石垣の石を接吻し、或は鋪石の石に座して泣涕し、左の唱和をなすと云ふ。

主唱「死れ果てし宮の爲に 衆和「孤座して我等は歎く。」

唱「崩されし石垣の爲に 和「孤座して我等は……………」

唱「過ぎ去りし我威風の爲に 和「孤座して……………」

唱「死せる我人豪の爲に 和「……………」

唱「焼かれし寶石の爲に 和「……………」

唱「躡きし祭司の爲に 和「……………」

唱「彼（エホバ）を 蔑にせし我諸王の爲に 和「……………」

唱願はくば爾シオンを慰み 和エルサレムの子等を集め玉へ。

唱急げ、急げ、シオンの救者 和エルサレムの心に語り玉へ。

唱願はくば美と威風とシオンを圍め 和あゝ爾仁慈をもてエルサ

レムを顧み玉へ。

唱願はくば王國速やかにシオンに復れ 和エルサレムを歌く者等を

慰め玉へ。

唱願はくば平和と歡喜永くシオンにあれ 和而して(エツサイ)の枝

エルサレムに芽ぐまんことを。

今日は人少なし、黒き被衣したる猶太婦人四五名鋪石に座して祈念を凝らすを見る。

猶太人の會堂は金碧の裝飾なくして清楚なるものなり。

見物に入りて帽をとらむとすれば、毛帽のラビ、勿と云

ひて頷く。

其市場に到りては、つり下げたる羊の股に蠅の眞黒にタカれるあり、一坏程の暗き洞の如き店先に老爺の胡踞かきて紅革の沓を縫ふあり、キタなき山羊の往來に繫がれたるあり。不潔甚し。

エルサレム城外の第一瞥は平凡に人を驚かしめ、エルサレム城内の瞥見は、人をして一炬に焼かんことを欲せしむ。

鐘の音

廿七日。安息日なり。朝清き鐘の音に、露臺に出で、眺む。

余が室の前なる露臺は、橄欖山と近く相對し、斜にエルサレム北部の城壁を見る。山のはづれ、城の上、半面を露はすは、死海の向山也。橄欖山より出でし朝日の光は、今山に城に足下の無花果園に溢れて、雀嬉々として噪げる中を、エルサレムの内外寺々院々各會堂の鐘はしきりに鳴りて朝の光れる空気を顛はす。橄欖山の頂にいと高

き露西亞の鐘樓の鐘の音は遠く、圓屋根幾個中に十字架を冠せる御墓の寺の鐘の音は近く、眼には見へねどある限の寺院會堂の鐘は、高く、低く、近く、遠く、澄みて鋭く、濁りて太く、おのがじ、おのが音が音を鳴りて、一つの調に和しつゝ白光の空高くのぼり行く。あゝ美しき朝、嬉しき鐘の音。

エルサレムの主

露臺より見れば此處其處の建物の上高く國旗の翻るを見

る。十字架の御墓の寺よりや、下りてモスク、オヴ、オーマ
 ルの圓屋根には偃月の立物われは貌に立てり。猶太人は
 聖殿を喪ひて、其會堂は城深く埋れたり。
 誰かエルサレムの主なるぞ、と不圖眼前の景に思ひぬ。
 政治上には土耳其のエルサレム、ソロモンの殿の跡には
 彼等がモスク立てり。歴史と執念と此に比例せる現下人
 口の數より云へば、無論猶太人のものならざる可からず。
 エルサレムと云はず、パレスタイン全地に尤も多く寺院
 精舎の數を有するより云へば、羅甸希臘の舊教徒のもの
 ならん。古蹟に對する彼等の熱心は驚く可く、兩派の古

蹟争ひは殆んど血を流すまでに及びぬ。學校を設け、孤
 兒院を立て、病院を経営し、宣教師を續派し、乃至商工
 業に精勵する英米獨の新敎國は、またおのゝエルサレ
 ムを人手には渡さじとす。猶太人、回教徒、十字軍人の
 子孫、皆さまざまにエルサレムを争ふ。

誰かエルサレムの主たらん。

眼前の景に余は正しく世界の現狀を見ぬ。

皆天の寵兒たらんとす。皆エルサレムの主たらんとす。

然れども神は偏なく見玉ふ。靈と誠を以て拜する者、柔
 和なる者、愛する者、唯よく地を嗣ぐことを得む。

緋の衣、石の礫

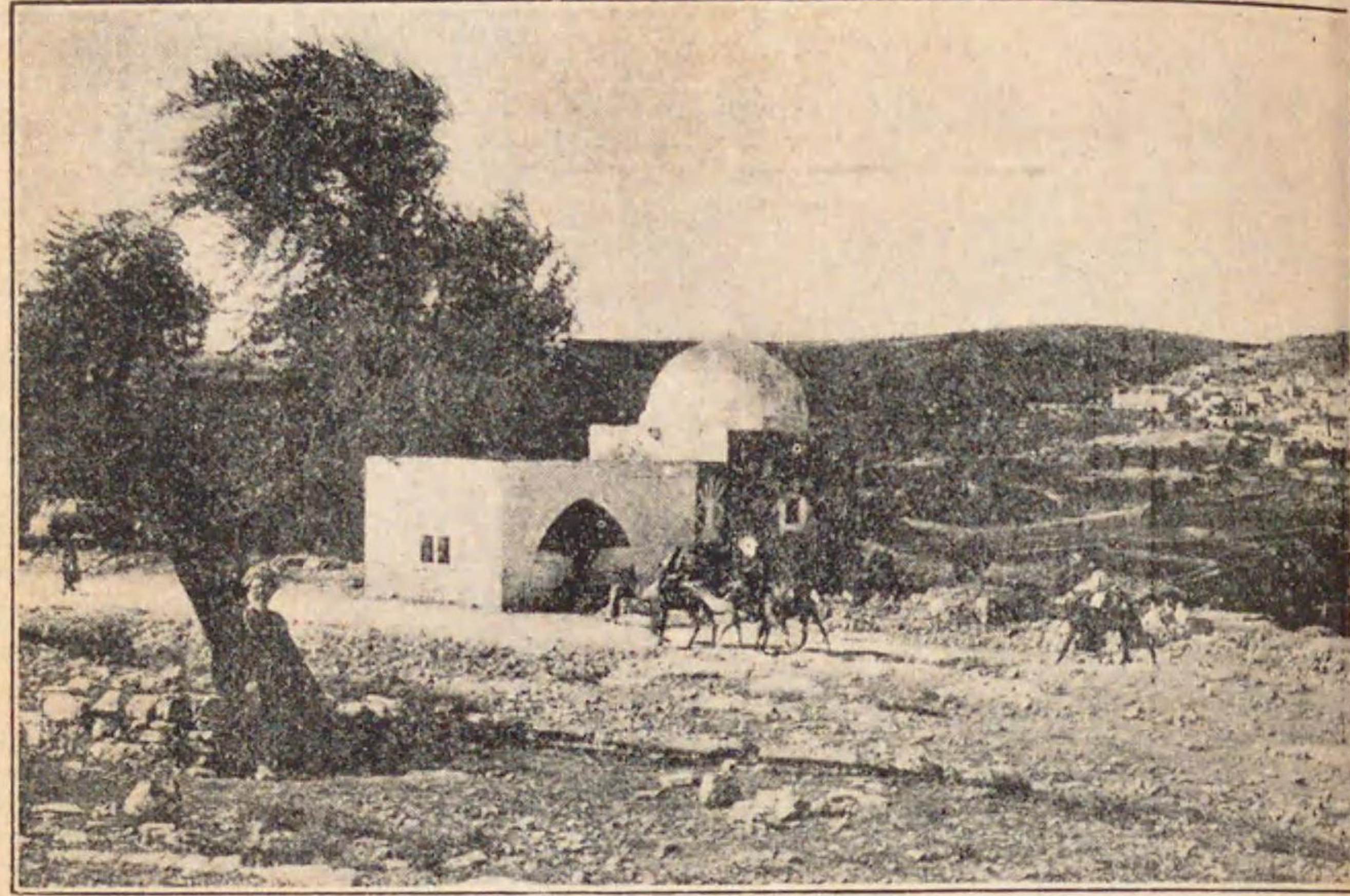
午前は英國旗の翻る某教會に行きて禮拜に列す。正面に金色の十字架を飾り、大蠟燭を點し、監督緋の衣着て禮拜を司ごる。莊重はあり、されど嬉しからず。歸途、橄欖疎に生ふる麥圃に徑して過ぐる時、老ひたるユダヤ人四五人、路傍に立話をなし居れるを、土耳其帽の少年、十四五、十二三の者五六人、頻に擲擄してありしが、やがて小石を拾ふて投げぬ。老翁等はまたかど云

へる如く唯惘然として小供の方を見る。

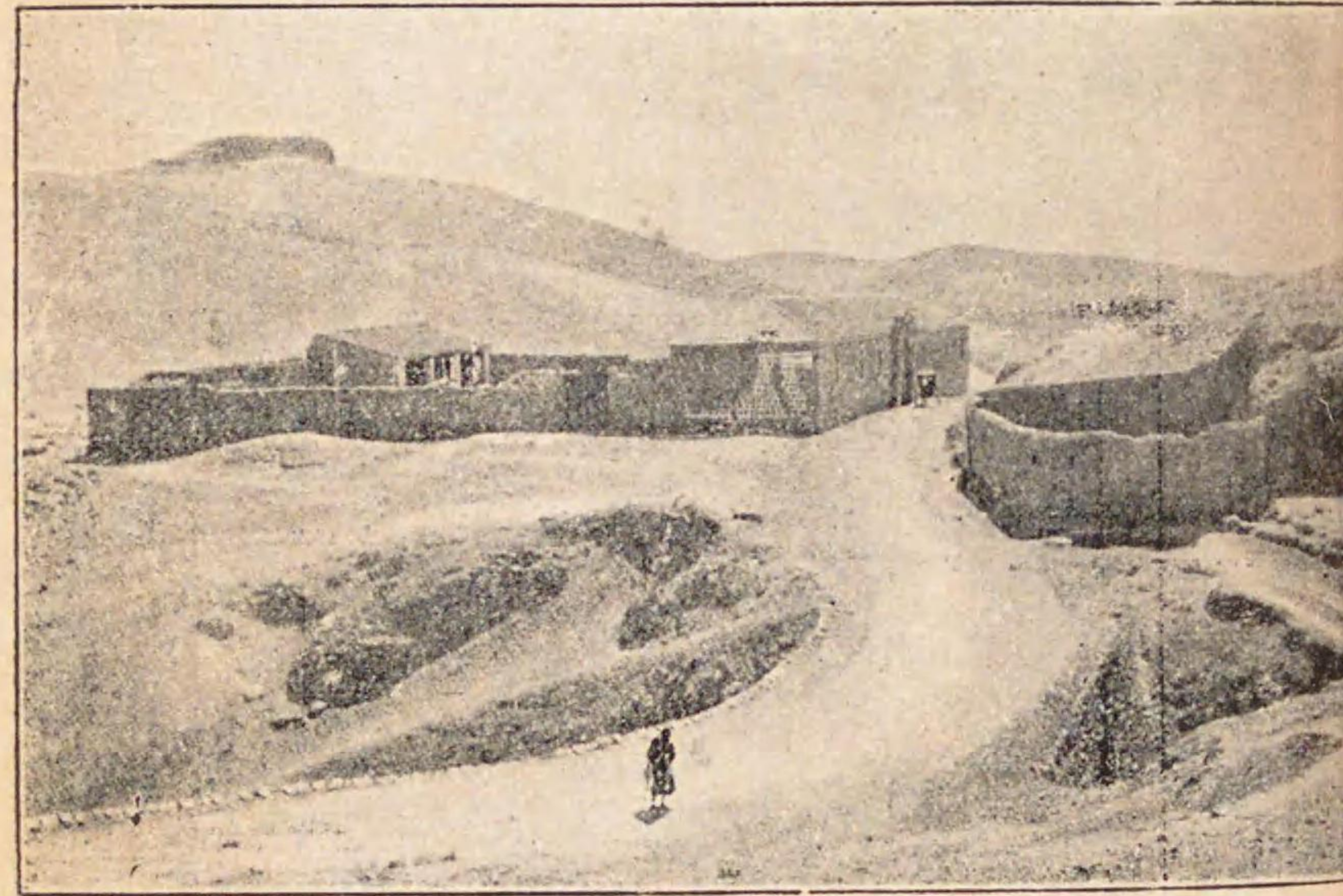
彼等が同種同族にして飽まで富めるロスチャイルドは彼等の兒女の爲に此郭外に學校を設けしと聞く。されど彼等に要する所は富める親類にあらず。

ペテレヘム

二十八日。マツケー君、アブダラ君は今朝陸路ナザレに去りぬ。余は宿の若主人ロポルト君とペテレヘムを見る。エルサレム城南ヒンノムの谷を尻眼に見て、大道西南に



ムヘレテベと墓のルケラ



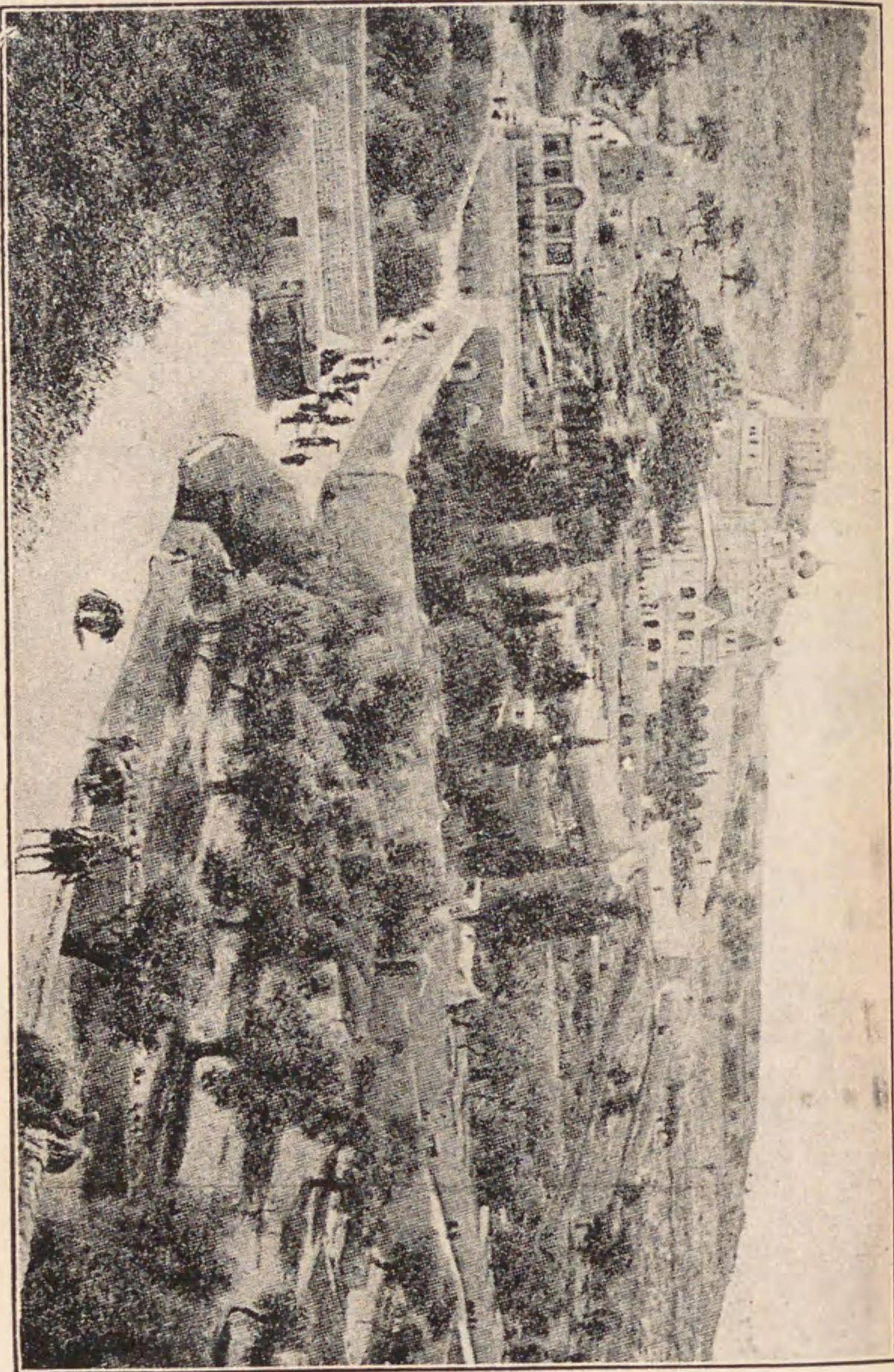
(亭人ヤリマサ善) 道コリエ

丘の上をうねる二里餘。左右の山畑は白楊に似たる彼橄
 欖と葡萄となり。所々に寺院病院を點す。路上に博士の
 井路傍にラケルの墓など云ふものあり。やがて路はヘブ
 ロンへ分岐す。余はヘブロンのアブラハムの椽なるもの
 を行きて見ず、直ちにベレレヘムの邑に入る。
 丘に倚りて北面し、蠅多き土石の家高低す。人口約一萬、
 農牧を重にし、餘は橄欖細工、貝細工などを業とす。聖
 マリヤ寺(誕生寺)は邑の一端にあり。羅甸、希臘、アルメ
 ニヤの三派に共有せられ、古蹟所有權の争昂じて時々大
 喧嘩となるが爲に、土耳其兵士が劍つけ銃にて寺内を警

戒し居る、沙汰の限と云ふ可し。此處が基督誕生の場所
と云ふ所をば、大なる白銀の星もてしるしとす。所々見
物したる中に、眼にとまりしは、審の如きもの、表にか
けしへロデの命により兵士が二才以下の小兒を殺す油繪
なり。ロボルト君の話によれば、此審の奥より先年多く
の小さき白骨を見出したりと云ふ。眞ならば、教主に代
はりし可愛の骨にとこしへに光榮あれ。
馬槽の昔は誕生寺に想見す可からず、邑の上なる高きに
のぼりて四方を望む。ロボルト君ステッキをもて彼處此
處と指點す。茶色の山うねり、灰色の谷陥り、彼がルツ

の落穂おちほを拾ひろひしボアズボアズの島はたと云いふあたり民々たんにん島の麥むぎ黄きに、
 彼かれが降誕かうたんの夜よの牧羊者ひつじかみの野のなりと云いへるほとり橄欖かんかんの
 綠みどり白しろし。ダビデダビデのふるさと、サウロペリシテ人じん幾合いくかつせん戦せんの
 跡あと、見渡みわたせば風景ふうけい蕭條しょうじょうとして日影ひかげ空むらしく明あきらかに、眼めを
 閉とづれば何處いづくにか紅顔こうがんの牧者ぼくしやが笛ふえの音響ねびやうく。
 思出おもひで多おほきベレレムよ。爾なんぢを歌うたふ可べくふたゝび昔むかしの詩人しじん
 を起おこせ。

ゲッセマネの園



ネムセツダ及部半南の山攬橄

ベテレヘムより歸りて、午後獨歩ケデロンの谷に下り、
ゲッセマネの園を訪ふ。ほとり近き聖母マリアの墓なる
ものは、見ず。

現實は歩々に美しき夢を剝ぐ。馬車通ふ大路に沿ふて、
歪める四角の石塚に圍まれたる一區をゲッセマネとは興
醒むる話也。ユダが師を接吻せしと云ふ場所あり。やが
て三弟子の意氣地なく眠りしと云ふ岩あり。皆塚の外に
て、園よりも上方にあり。園は徑約七十歩、鐵柵を繞ら
したる中に橄欖の古木八本あり。大なるは四五百年のも
のにあらざるべく老ひて、枝葉は茂りながら幹裂け洞に

なりたるを石もて圍むたり。他には柏楨類、及び草花を栽培す。客あれば番僧花を呈して保存料を請求す。此は羅甸派のゲッセマ子なり。園を出で、橄欖山を攀づる數十歩、露西亞の建立にかゝるゲッセマ子院あり。寶珠形の屋根大小七つ、金光燦たり。此處は見ず。所詮エルサレムは眼を閉ぢて見物す可き所也。

橄欖山

露立ゲッセマネ寺を横眼に見て、石ころの坂路を上るこ

と二十分にして橄欖山の頂に到る。

羅甸派こゝに昇天院を建つれば、希臘派も劣らじと、六階の高塔天を摩するベルゼール塔を建てぬ。余は二百十四級の螺旋階段を上りて、鐘樓の絶頂に立ちぬ。エルサレムより約二百呎高き橄欖山頂に建てし高塔なれば、絶好の展望臺、エルサレム及附近はこゝに残りなく正體を顯はす。

西ケデロンの谷を隔て、エルサレムは一目なり。神殿の跡は低く、シオンの邑は高く、圓屋根、尖りたる屋根、新月の屋根、十字架の屋根、平たき屋根、灰色に、茶色

に、稀に樹木の緑を點して、高く低く聳と重なり合ふ。
 ケデロンの谷とヒンノムの谷と深く陥りてエルサレムの
 山を擡げ、橄欖の樹と墓と點々せる崖を白き大路小路は
 うねりて城門に通ひ、人下り驢馬上る。山々のうねるは
 濤の永久に固まれる様にて、エルサレムは潮の花の凝れ
 るかど疑はる。げにエルサレムを望むには橄欖山を第一
 とす。基督の時代にはケデロンの谷更に深く、城壁の圍
 も廣く、莊麗なる神殿は堂々と東面して立ちたるなり。
 而して其壯觀の裏明らかに火のエルサレム血のエルサレ
 ム廢墟のエルサレムを見玉ひし基督のもし爾だにも今こ

この爾の日に於ての慟哭を聞けば、千載猶吾心弦の斷た
 むとするを覺ふ。

東は死海ヨルダンの谷いと近く見へて手にとる如く、あ
 まりに近きベタニヤは却て隠れてはづかに一端をあらは
 す。彼ベテバゲは直ぐ脚下の何處にかありしなるべし。
 南も北も茶色の山はるかに午後の日にうねる。
 さき程より起りし風つのもりて塔もゆるがむとす。下りて
 山頂の坦なる路を北へスコパス山の方へと歩す。
 日傾きて、風も何時か風ぎぬ。死海の方は山々紫になり、
 エルサレムは夕日に榮へて畫ける如し。橄欖山の北半部

よりスコバス山さんにかけて、山上山腹さんじやうさんぶくの麥むぎは已すでに熟じやくして黄きなるあり、猶なほ青あをきあり。後うしろの方かたよりざろく蹄音ちしおとして、山羊やぎ、羊ひつじの群走むれはしり來きぬ。牧者ぼくしやは杖つえを右みぎに、左ひだりに一疋いっぴきの小羊こひつじをかき抱いだけり。其後影そのあとかげを目送めくそうして余よはしばし橄欖山かんらんさんの夕日ゆうひに立たちぬ。

眞のゴルゴタ

二十九日。夜來劇やらいはげしき腹痛ふくつう下痢げり。終日昏々しじつこんこんとして床とこにあ

三十日。今日も臥ふす。

三十一日。今日はつとめて起おきて城外じやうぐわいなる死しの郷さとを見る。

城北じやうほくダマスコ門外もんぐわいひやつば百歩ひゃくぱにして、塵芥捨場ちみくすてばに近ちかく、鬪體形たうたいがた

の小さき一いっの堆丘たいきうあり。多おほくの學者がくしやが眞しんのゴルゴタ十字じよじ

架かの跡あとと倣なすは此これ、ゴルドン將軍しやうぐんの如ごときも其説そのせつを唱となへぬ。

形状位置けいじやうちげにさもありぬべく思おもはる。今は塀へいを繞めぐらして

回教徒くわいけうとの墓はか多おほく並ならべり。此邊このへん一體いったいに岩いはを鑿はりし横穴よこあなの墓はか

多おほく、士師ししの墓はか、列王れつわうの墓はかなど云いひ傳つたふるもの其數そのかずを知し

らす。基督キリストの骸からを容いれし園そのの墓はかなるものも、ゴルゴタ附ふ

近きんの岩洞がんどうのひとつが其それなるべしと云いふ。余よは見みず。入いり

百十六
て覗きしゴルゴタの下なるエレミヤの洞には、新しき猫の死骸ありし。

死の谷

ケデロンの谷を南へ下る。
谷の西側聖殿の下なる崖には回教徒の墓白く、若夫れ猶太人の墓に到りては、谷の東側橄欖山の一部よりヒンノムの谷の向山かけて、大小古今其幾何なるを知らず。岩を削り成し、アブサロムの墓なるもの、ヨシアバテ王の

墓、ザカリヤの墓あり。遙上方には、建つる者よと基督のユダヤ人を叱られし預言者の墓あり。石の邦、石多くして、其民の心も石なり。彼等は常に小石を拾ふて眞理を語る預言者を打殺し、身を翻して大なる石を以て其墓を建つ。新しき墓の多きは、異邦にある猶太人が遺言して其骸をエルサレムに葬らしむるに因る。流石に不便なり。
ケデロンの谷はもと偶像モロクに小兒を犠牲に献げしことあるより火の谷とも稱せられ、末日の審判は此處に行はる可しと古くより言ひ傳へたり。橄欖山の山つゞきを

罪業の山と云ふ。山急に石鋭くして劍の山を思はしむ。
 此山に寄りてシロアの村あり。多くは昔の猶太人の塚穴
 を利用して家となす。遠く見れば岩と同一色にして分ち
 難く、唯處々に黒き穴を見る、穴は窓なり。一村皆亞刺
 比亞人、男女鬼相を具へて、顔を見れば老幼バクシーシ
 と手を出し、ある十二三の小さき鬼女の如きは石を投げ
 ぬ。此あたり谷深く、仰げば聖殿は遙かの上にある。是
 れや死の谷、地獄谷、滅亡の谷、人を避けて石上に憩へ
 ば、蜈蚣に似て圓く蚯蚓に似て黒く足ある五寸ばかりの
 蟲の這ひ寄るも氣味悪し。

谷底は何處よりか水少し流れて、野菜など作れり。谷を
 わたりて、や、城の方へのぼり、シロアムの池を見る。
 三間に九間程の汚水、石垣崩れて芥溜れり。こゝより不
 淨門にのぼる。下水流れて犬猫の死骸狼籍す。ケデロン
 の谷とほい直角をなすピンノムの谷の向山はまた古來の
 墓地、傳説のユダが血の價なる血の島、アケルダマも其
 處にありと稱す。附近には癩病院あり。
 此兩谷は上なる聖殿の山に對してまさしくダンテ神曲中
 のものなり。
 シオン門外にダビデの墓なるものと、最後晩餐の室なる

ものといと近く寄せられ、猶太人の或は立ち或は座して蚊の群のわめくが如く祈禱文を誦するを見て歸る。

エルサレム雜記

六月一日。昨半日の見物に疲れて、終日臥す。海拔二千五百呎の山上、日間白地を着るも、夜は綿衣を思ふ。エルサレムの冬には氷雪あり。乏しきものは水。ペテレヘムのあなたより鐵管にて引きたる外に、城の内外二三の間歇泉あり、バクテリアの巢

なる小さき溜池は幾個かあれど、素より用に足るべくもあらず。されば家々雨水を貯へて飲用使用に供す。雨期は十一月の末より四月初に到る。多きものは蠅と驢馬。驢馬の鳴き聲綿線器械の軋るに似たり。平和の君をのせし昔はなつかしきも、首と四足を切りはなし、綿羊の血だらけなるむくろを、屠場より驢馬の負ひ來るはうたてし。更に多きものは石。寧ろ少なきものは土と云ふに若かず。山は石、木少なし。多くの家は石と石灰にてつくる。平たき屋根、半圓の屋根、外側に石階ありて屋根に通ひ、

また下りて地下室に入る、床も石若くはタ、キ也。路鋪くも石、垣も石。人の心も石たらずんばやまじ。曰く、石叫ぶべし、曰く石をもアブラハムの子たらしむ、四福音書にごろく、石の轉がるは怪むに足らず。手近に刑具あれば、石刑の容易に行なはるゝも故あり。白堊質の石灰岩、白つぼき土、風吹けば白塵飛び、日ざかりには白く晁めきて白熱を思はず。暑さは寧ろ眼より入る。

茶色の山、白き道、所々に灰白の岩を露出す。羊山羊の山邊に牧せらるゝが多し。岩の動くは羊なり、山羊の臥

したるは多く石なり。遠望の丘に村を見ず。

空気の澄明驚く可し。十町足らぬ橄欖山と四里の上越す

死海の山と大なる差なし。星の夜に天文學者と詩人は喜

ぶ可きも、遠近の別なく色彩の變化少なきに畫家は筆を

擲つ可し。

園の朝日に雀鳴き、城の夕日に鴉鳴く。六月初旬麥未だ

蒞られず、石榴は花、杏は熟す。城内アルメニヤ區のカ

ヤバの家の跡なるものゝほとりに數百年の大松を見ぬ。

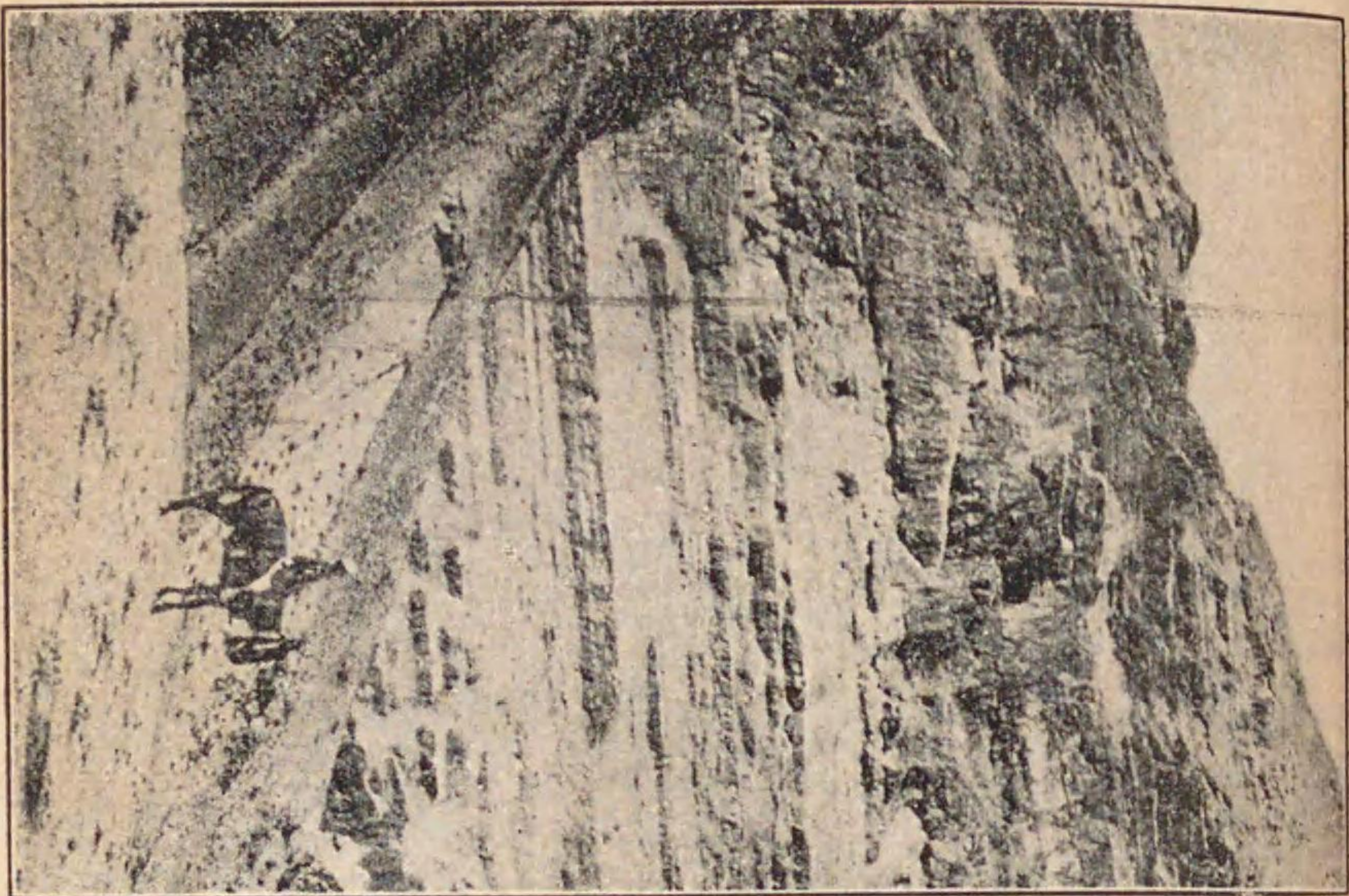
エルサレムは橄欖山より眺む可く、眺むるは日の出を第

一と稱す。夜の幕谷に落ち、エルサレム朝日の衣を纏ふ

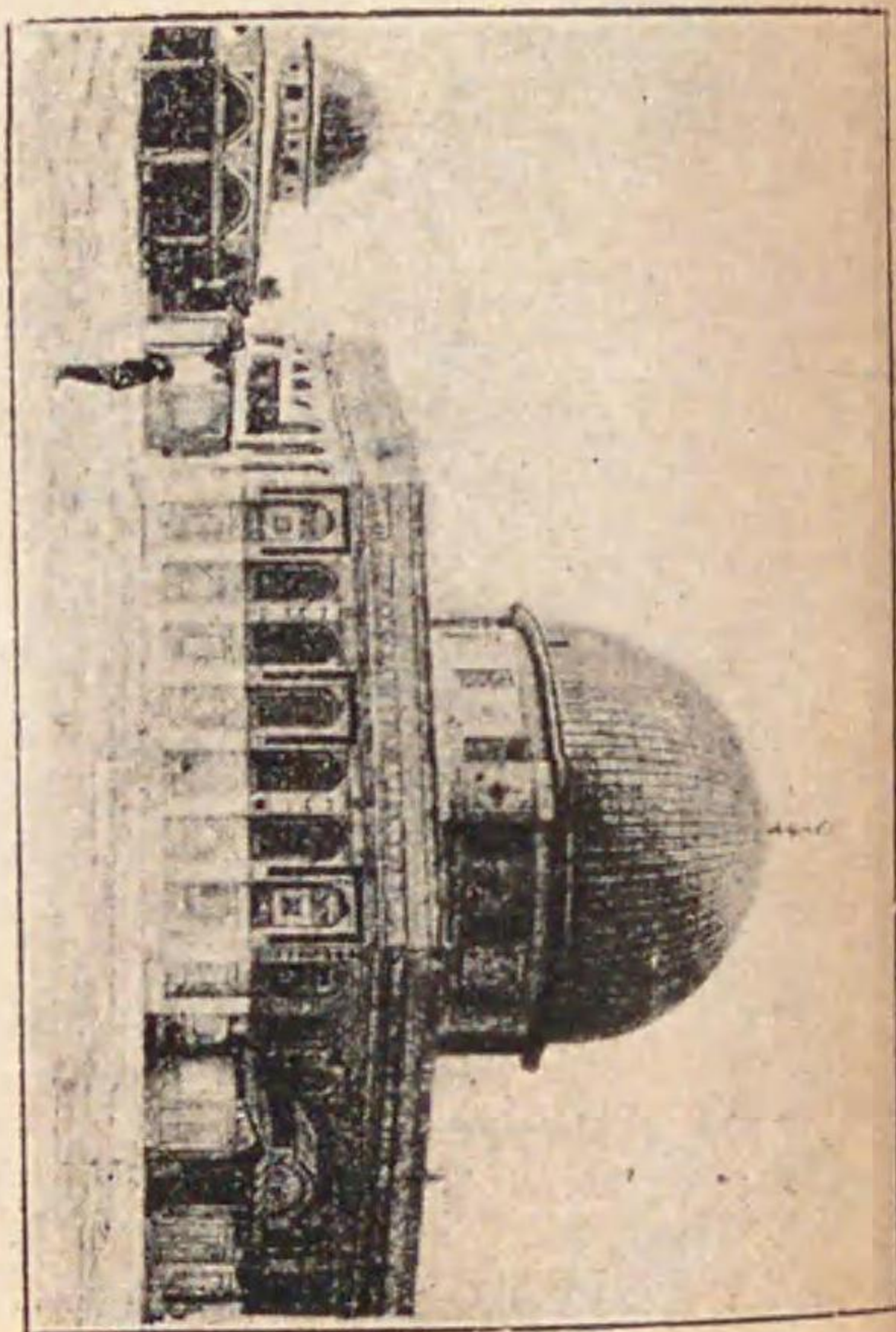
時、誰かイザヤと共に起きよ、光を放て、エホバの榮光
 爾の上に照り出でたればなり」と歌はざらん。

神殿の跡

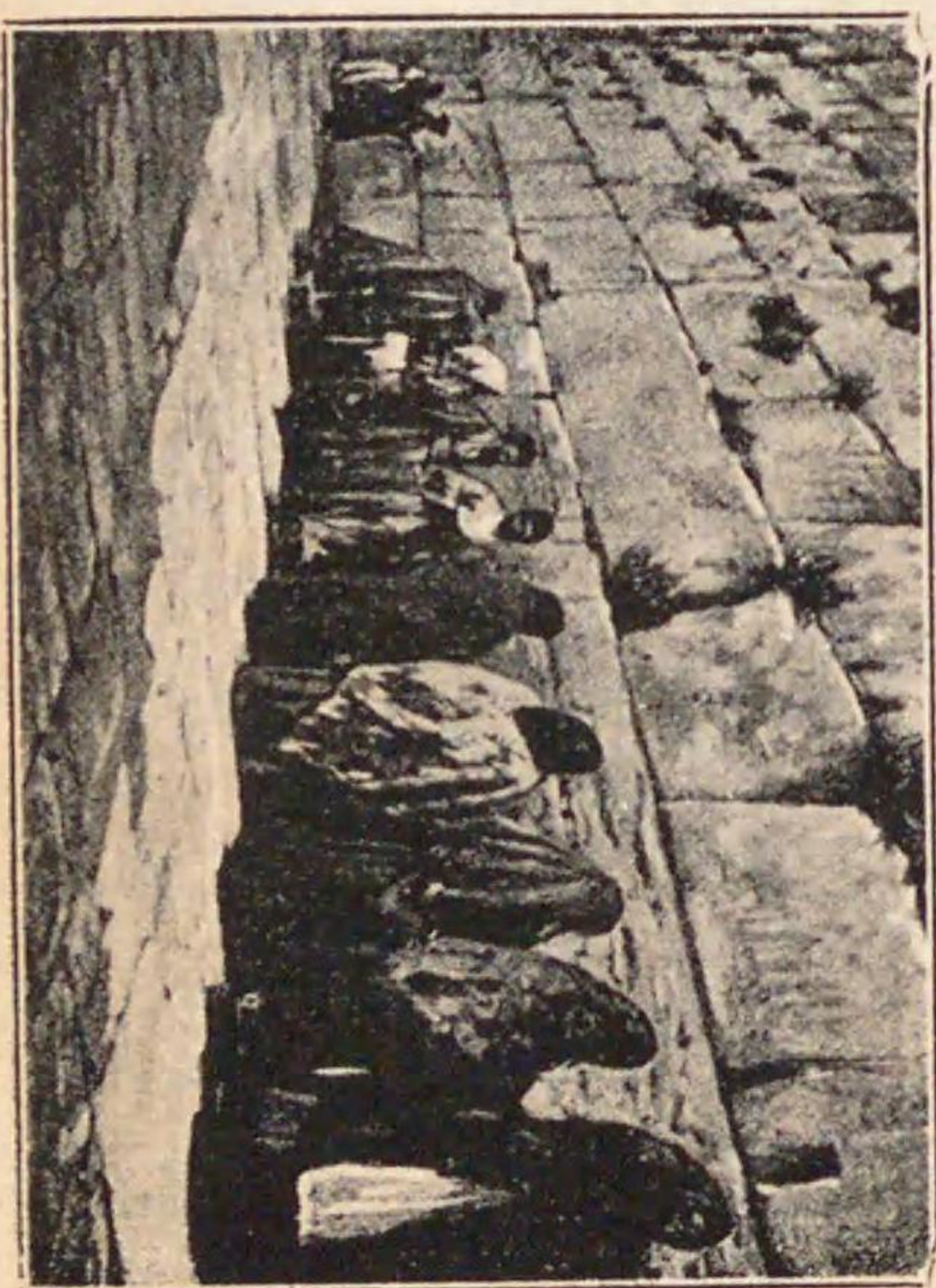
二日。先日打つけに侵入して難なく番人に追返へされし
 聖殿の跡を、今日はロポルト君と、其筋の許可を得て、
 土耳其兵士一名護衛に伴ひ見物す。
 城の東南區、闊くキタなき綿市場の穹窿を潜り、石段を
 上り、約十五町歩、快豁たる神殿の境内に入る。もとの



のぼるす積之山の遺跡



モスクのドーム



エジプト人の労働場

神殿の基礎にやあらん礎うちし跡ある天然岩を見て、また階段を上り、モスク、オヴ、オーマルの本堂を見る。

オーマルはマホメットの舅の名なるも、此堂は實は七世紀中回王アブデルメリック創立し後しばしば改繕修築を加へたるもの、メッカについて回教徒の神聖視する所。本堂は八角、圓屋根、新月を冠す。六丈角にして建物の内徑十八丈。外は下部大理石、上部は一枚づゝ特別に焼きたる白、碧、緑各色の陶瓦を張り、内は色ガラス、青貝、色磚瓦、大理石のモザイクにコランの文句金の蔓の如くからみ、金網張りし窓漏る薄き光にやゝくすみたる

色彩しきさいとして頗すこぶる美也びなり。本堂ほんどうの中心ちゅうしんは約百疊敷やくひゃくでふじよの天然石てんぜんせき灰岩くわいがん、是れ回教徒くわいけうとの所謂聖せいなる場所ばしょ、此巖このいばの爲ために此堂このどうあり、「聖巖殿せいがんてん」の稱しょうある所以ゆえん。アブラハムがイサクを献ささげんとせしも此磐このいばと稱しょうせられ、マホメットが祈いのりし時額ときひたひにつけし岩いばの凹くぼみ、マホメットが十九の金釘きんくぎをうち一釘いつてい落おつる毎ごとに一時いちじ代經過たいけいごし釘盡くぎつくる時世ときよの終おはりとなるべしと預言よげんせしに、惡魔あくま來りて其十五と半はんを奪うひし時、天使てんしがプリエル來りて之これを制せいせし爲ため、漸やうやうく三個と半はんを殘のこせりと云ふ碧玉板へきぎよくばんの釘くぎ、其他色々そなたいろく斯かる場所ばしょには附物つきものの不思議ふしぎあり。巖面がんめんの一方いつぱうを削りて夷たひらになしたるは、十字軍士じよじぐんしが

此處こゝに拜壇はいだんを設けし跡あとと云ふ。巖いばにはや、大なる穴あなあり、巖いばの南方なんぽうは洞どうをなして足もて鋪石しきいしの一いつ所しよを踏ふめば空洞くうどうの音おとあり。此巖このいばをソロモンソロモンの神殿みやの奥おくの院いん、聖せいの聖せいなる場所ばしょとするにはや、大なるに過すぐるも、巖いばに孔あなあり孔あなに血ちなご流ながれたる痕あとあれば、昔犧牲むかしにえなど此巖上このがんじやうにて献ささげしなるべし、とロボルト君くん語る。オーマルの本堂ほんどうを出いでて南みなみに石階せきかいを下くだる。水溜みづためあり。廣ひろ場ばにはサイプレス樹じゆす數本立ほんたてり。やがてエル、アクサアクサ堂どうに入る。東羅馬ひがしローマの帝ていジヤスチニアンジヤスチニアンが建立こんりやうせし會堂くわいどうを、回くわい教徒けうとのモスクにせしなり。此處こゝにも基督キリストの足跡あしあと、ぬけ得え

すば天國に入られずと云ふ間窄き二本柱などあり。ヒン
 ノムの谷を見下ろす窓の鐵格子に襪襪切れ多く結びたる
 は、順禮の願ほごきに結ぶなりと。
 アクサ堂を出で、石段を地下室に下り、更に下りてソ
 ロモンの廐と稱するものを見る。約五十間に三十五間の
 地下室、ソロモンの時代にはあらざらんも、供物の家畜
 など牽きて出入せし所か。大なる石の角柱には、十字軍
 士が馬繫ぎし孔の跡あり。頭上にサイブレスの根を見る
 は奇なり。
 此處を出で、石壁に沿ふて北に歩む。下はケテロンの谷、

橄欖山とは話す可し。石壁の下部には古き石残り。石
 柱の一片横に石壁を貫いて出るあり。回教徒の傳説によ
 れば、末日審判の日には、一條の線金此柱頭より橄欖山
 に渡され、耶穌は此處に座し、マホメットは橄欖山に座
 して、共に審判者たり、義人は天使の扶助により電光の
 如く線金の上を渡るも、罪惡の子は落ちて下なる谷に亡
 ぶと稱す。


神殿の東門は即ち金門。今のは中世以降のものなれ共、
 昔基督の驢馬の子に乗り、ホザナよの歡呼、櫻欄の葉の
 さき拂ひと共にエルサレムに入り玉ひしも、此處よりと

傳ふ。回教徒の間には、他日クリスチャンの王此處より入りてエルサレムを占領す可しとの云傳へありて、何時の頃よりか此門塞がれぬ。

昔の鋪石とベテスダの池

聖殿の西北に當る今の兵營はピラトが公廳の跡と稱せられ、其前なる狭き巷路を御痛巷路即ち十字架の路と稱し、御墓の寺のカルバリーに到る。此處に巷路を越へてかゝるア、チはピラトが見よ、これ其人なりと基督を猶太人

に示せし所として「見其人」ア、チと名づけられるも、例の癖なるべし。

此ア、チの北の片脚さへへたる「シオン」の尼寺に入りて、羅馬時代の鋪石の残れるを見る。滑らかなる石灰石の面に  斯様の形を劃せるは、羅馬の兵卒等が鋪石の上にて博奕なごせし跡なるべしと云ふ。吾心の怪しく躍るを覺へぬ。心無き彼等は其職分と稱するもの、鬱晴しに賽振りし如く、よき慰みにユダヤ人の王に紫の袍着せ棘の冠かぶせさまくと弄びて面白氣に笑ひしなるべし。昔往來の路なるべく思はるゝ所の鋪石には、馬蹄を滑らせじ

と石に刻を入れたるを見る。すべて此等は現今の巷路より丈餘の下にあり。昔のエルサレムは實に深く埋れ居るなり。年々發掘するに従つて昔の面目少しづつあらはれ来る。エルサレムの埋れたるは、猶基督の眞面目の埋れたるが如けん。

此尼寺に宗派國籍の關係なく一百あまりの孤兒を收容したるは嬉し。創立者は改宗せる猶太人なりとて、案内の中老尼は壁にかけたる油繪の二人を指しぬ。

ベテスダの池と云ふものは一ならず。余は近年の發見にかゝるものを見る。石階を下りて水は窖の如きが底に黝

然と湛ふ。五つの廊のアーチの名残、羊彫れる門の斷片、假令基督時代のものならずとも、昔の基督教徒が信せしベテスダの池なるべし。此池の入口に五十七ヶ國語もて約翰傳第五章ベテスダの池の條を書きたる札を掲ぐ。思ひもかけぬ所にて我國字、漢字を見たるは嬉しく、もろもろの舌アバ父と呼ぶ將來を鮮にこゝに示されたるは更に嬉し。

名残の夜

三日。二たびエルサレムに安息日を迎ふ。明日はナザレ
テベリヤの湖さして立たむとすれば、終日蟄居して荷物
など整理す。

橄欖山の夕日は白き月夜にかはりて、夢の如きエルサレ
ム、燈の影ほのかなり。四千餘里東より来て、尊き稚兒
の影だに見ず、明日は早北へ去らむとす。覺期の上なが
ら、今更に俗の俗なるエルサレムよと失望せる吾も、去
らむとすれば流石に名残を惜まるゝ。燈の下、宿帳にし
るさむとて斯く。

* * *

「何ぞ死にたる者の中に生きたる者を尋ぬるや、彼は
此にあらず、甦りたり」と主云ひ玉ふ。

吾來る。見よ、千九百年は過ぎぬ。基督は在さず。
残れるものは唯天の青、白き丘、而して徒に形のエ
ルサレムの主たらんと争ふ人の子の鄙劣のみ。

吾心悲哀に満たされぬ。

「起きよ、光を放て、爾の光來り、エホバの榮光爾の
上に照り出でんとす」と聲ありて呼ぶ。

「新しきエルサレムを！新しきエルサレムを！」と吾心
應ふ。「願はくは彼再び來り、エルサレム身ぶるひし

て塵より起たんことをと吾渴ける心應ふ。

吾頭低れぬ。吾夢を夢む。見よ、彼の王國來れり。

エルサレム——是れ此エルサレムなりしか——は其首都。

天を刺す高塔の上より雄大なる十字の旗を翻る。あ

らふる地方よりあらふる色の人こゝに集ひたり。そ

は國民の墻壁は消えて、世界は唯一の家族となりぬ。

唯一の大家族、唯一の愛の言葉、全能者はこれ父、

基督は長兄。——而して吾は甚しく悦べり。

吾歌ふ。吾寤む。寤めて嘆息す。——此は夢なりき。

あゝ夢か。夢なりしか。終に夢乎。遮莫、夢ならば

是れやがて現に移す夢、然なり、實現す可く、さる
可く、せでは已むまじき夢ぞ。

愛する兄弟よ、姉妹よ。いざ聲を揃へて熱心に斯く

祈らん、

「爾國を來らせ玉へ」

最後の幻

四日。朝六時、馬車にて橄欖館を立つ。エルサレムは猶
夢の中にあり。

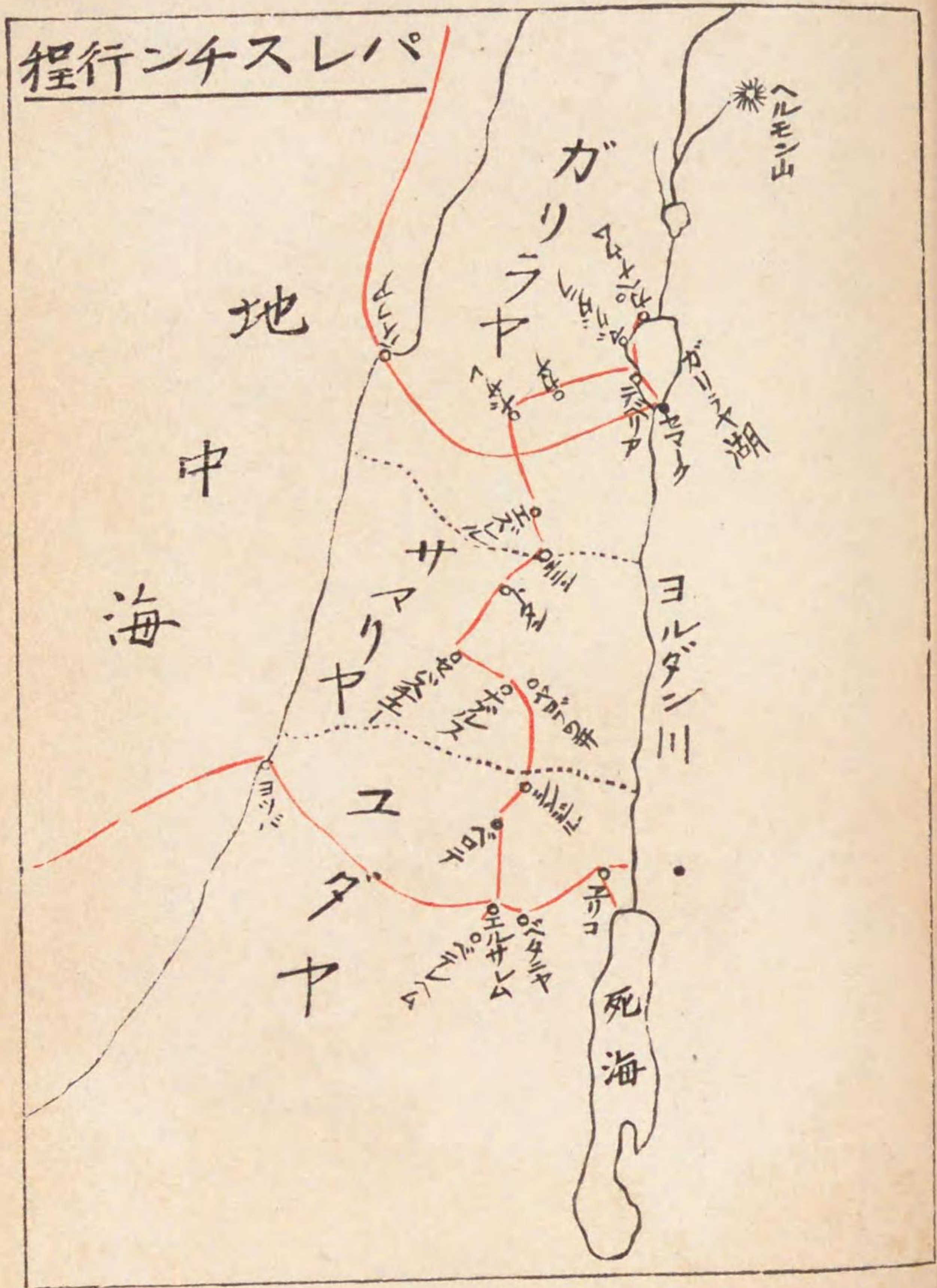
城北スコバス山を越へて、ダマスコ街道は礪確たる山又
山をうねりくへて北へ走る。昔のラマの跡なる村を車上
に眺めつゝ、今のエル、ビレエ昔のペロテの村に到る。丘
の上に一軒の茶小屋あり。馬の脚を休ますべく馬車は其
前にとまりぬ。

此處はエルサレムを距る三里餘。去者の最後に、來者の
最初に、エルサレムを見る所。昔逾越節などにガリラヤ
あたりよりエルサレムに上る者は、此ペロテにて詩篇の
京詣の歌を唱へはじめ習なりしと傳ふ。

かへり見すれば、山又山の幾重隔て、橄欖山頂の露西

亞の高塔小さくしていとしるく、スコバスの山越しにエ
ルサレムは遠見の姿を美しく露はす。畫の如く、又幻の
如し。

おゝエルサレムよ。さらば、エルサレムよ。



馬上三日の記

(エルサレムよりナザレへ)

車 上

六月四日、エルサレムを立ち、サマリアを経てガリラヤに赴かんとす。十字架よりナザレの大工場へ、即ち四福音を逆に讀むなり。

エル、ビレエにてエルサレムに最後の告別をなし、馬車は

いよ／＼北へ走る。車中には案内者一名載せたり。名は
フイリップ、ジャルルク、三十八九、シリヤ人にしてク
リスチアンなり。此馬車道は、八年以前獨逸皇帝が土耳
其領内遊歴の折修繕したるものとか。獨逸の漫遊以來バ
レスタインに於ける獨逸人の活動著しく、到る處のホテ
ルの如きも獨逸人の經營に係るもの多し。
アブラハムが天幕を張りしベテルの跡なるべしと云ふ所
をはじめとして、道の左右は遠き山の側、近き谷の隈、
到る處に舊約の古蹟と十字軍時代の建物の名残あり。岩
の山、畑なくして唯處々に橄欖林或は稀に葡萄畑を見る。

馬車どまりし或小屋にては、白き桑實を賣れり。白、紫
 兩種あり、皆果實の爲に植ふるなり。ダマスコ附近には
 養蠶用の桑畑ありと云ふ。やがて強盜谷、強盜泉あり。
 岩崖の下、草地數弓、荷を卸して駱駝臥し、人憩ふ。我
 儕の馬も水のみて行く。やがてまた十數頭の駱駝鈴を鳴
 らし驢馬の人これを驅り來るを見る。荷は皆杏。
 昔のサマリヤ境に近きシンジルの村はづれにて、路傍橄
 欖樹下に三頭の馬を繋いで晝寢する男あり。ジャルルッ
 ク君車上より聲かけしが、寤めず。車を下りて呼びさま
 し來る。此は夜をこめてエルサレムより余等の乗る可き

馬を牽き來り此處に待てる馬士イブラヒム君とて矢張シ
 リヤ人なり。やがて道は急坂の上に盡く。此あたりやう
 快瀾たる山坡の上、遠くヘルモン山の片影を見得べしと
 云ふ。今日は空少し夏霞して見へず。余等はこゝにて馬
 車を下る。エルサレムより約八里。

馬 上

急坂を下りて、旅亭の址あり、側に泉湧く。ガリラヤよ
 りエルサレムに行くユダヤ人の男女、および駱駝ひき、

羊ひつじかひなど大勢おほせ憩いこふ。余等よらも無花果いちじくの蔭かげを求もとめて、晝食あちじきす。

や、ありて馬うまに上のぼる。余よは白馬はくま、栗毛くりげはジャルルック君くん、イブラヒム君くんは余よが荷物にものを馱だせし黒くろに跨またがる。オトナシキ馬うまをど特とくに頼たのみ置おきたる甲斐かひには、余よの馬うまは極きはめて柔順じうじゆんなれど、極きはめて足遅あしおそく、えばく道草みちくさを食くらふ。イブラヒム君くんうしろより余よの馬うまの尻しりをたたく。駭おどろきて突然とつせん駈かけ出し、余よは殆ほとんど落おちむとして馬うまの首くびを抱いだくものいくたび。パレスタインパレスタイン六月ろくがつの日は容赦ようしゃなく頭上づじやうより照てりつけ、古ふる鞍くらに尻しりいたく、岩山いはやまの上のほり下くだり頗すこぶ困憊こんばいを極きはむ。旅杖たびづえ一つ

鞋サンダルに岩角いはかどを踏ふみ小石こいしを踏ふみて汗あせになりつゝ、徒歩とほし玉たまひし師しの昔むかしを思おもふ。タオルもてヘルメット帽ぼうの上うへより頬ほかむりし、旅袋たびぶくろより毛布けつと取出いだして鞍上あんじやうに敷しきて、また行ゆく。岩間いはまに錦糸きんし撫子なでしこなどの咲さけるを見る。岩山いはやま幾いくつか越こへて、また馬車ばしやも通かよひ得うべき谷たにの道みちに出いづ。山東西やまとうざいに低ひくき屏風へうぶを開ひらき、南北なんぼくに細長ほそながき谷間たにまは麥熟むぎじゆくして黄河こわがの流ながるゝが如ごとし。已すにサマリヤの境さかいに入いれるなり。

ヤコブの井

狭き谷の麥圃に沿ひ、北行良久しく、西日まばしく馬影斜に落つる頃、路の左に聳へ起る一千尺ばかりの山を見る。中腹石屏を立てたる如き山骨露はれ、赭禿の山頂に小さき建物あり。此こそゲリジム山、昔サマリヤ人のエルサレムに對抗して神を拜せし跡、今山頂の建物は回教徒の遙拜所なり、と案内者は説明す。こゝに谷は三叉をなし、街道はゲリジム山麓を西に折れてナブルスの邑に到る。余等はヤコブの井を見る可く、大道より右にきれ込む。しばし行けば、田隴の間塀をめぐらし杏の木茂れる一區斜面の地あり。此處は昔の寺の

跡、今は希臘派の小庵、ヤコブの井は境内にあり。馬を下りて入る。

年老ひたる番僧の露西亞人に導かれて、古寺の廢跡石累々たるを見つゝ、小石階を下りて、穹窿の建物いと小さく低きが中に入る。内に井あり、口径三尺ばかり、石を疊むでふちとす。番僧蠟燭の火をつり下ろして井の中を見す。中はや、廣く、岩を穿ち石を疊みて深さ七十尺、底には一滴の水無くして、石ころ満てり。哀しいかな、斯水涸れたること久し。井の傍なる壁に基督サマリヤの婦人に語り玉ふ小さき畫額を掲ぐ。建物の中にとりこめ

たるは、あらずもがなご思へど、昔のガリラヤ街道も此邊を通りしと云へば、井其ものは昔より云ひ傳へしヤコブの井たること疑なし。

井の側より出で、境内カヤツリ草の離々たる邊に佇み、ポケットより新約聖書取り出で、吾愛する約翰傳第四章を且讀み且眺む。頭上には「此山」ゲリジムの山聳ふ。見よ、サマリヤの婦人は指し、基督は目して居玉ふなり。直ぐ背なるエバルの山の山つゞきには、昔のスカル今のアスカルの三家村山に寄りて白し。瓶を忘れて婦人の急ぎ行く後影を見よ。弟子たち何ぞ愚しく顔見合はすや。

「目を擧て觀よ」、田は現に色づきて刈入時となりぬ、東の方狭き谷より向山の頂かけて熟せる麥一面夕日に黄金の波をうたすを見ずや。あゝ二千年何ものぞ。幽明何をか隔つる。基督は猶こゝに座して教へ玉ふ。活ける水は涸れず。感謝すべきかな。

ナブルスの一夜

ヤコブの井より遠からずして、其子ヨセフの墓なるものあれど、さるものは見ず。また馬に上りて西へナブルス

の谷に入る。南はゲリジム山、北はエバル山に挟まれたる谷なり。ゲリジムの山頂には古き建物の跡多く、エバルの山には一面に霸王樹茂れり。霸王樹は土地の人新芽を皮剥きて咀嚼す。

やがてナブルスに着き、羅甸派の精舎に宿す。總じてパレスタインの僧舎は、紹介狀だに持參せば、旅客を泊むる仕組にて、此處にも幾個の客床を設けあり、食堂も備はる。客は去る時應分の謝金を出して行くなり。エルサレムよりナブルスまで約十二里。

ナブルスは舊約のシケム、ふるき所にて、此處のサマリヤ人の會堂に秘藏するモーゼの五經は有名なるものなり。目下人口約三萬、外人の居留も少なからず、エルサレムに亞ぐ都會とす。半日の馬上に足腰夥しく痛めば、見物を廢して休養す。

夜は蚤と肢體の痛みに眠られず。晝間見置きし枕邊の聖母の心臓を劍さし透せる油繪は、解剖圖なごかけし様に、あまり心地よき寐ざめの伴侶にもあらざりし。

サマリヤの墟址

五日。日と共に馬に上る。上りて見れば、昨夜此痛さにてはと思ひし程にはあらず。サマリヤは概してユダヤよりも地味まされり。殊にナブルスの谷は、清泉處々に湧きて、橄欖、無花果、杏、桑、林檎、葡萄、各種野菜など青々と茂り、小川の末には蛙の音さへ聞へぬ。ナブルスを出はなれて程なく新道より北に折れ、山路を行くこと二時間、セバステエーに到る。即昔のイスラエル王國の首都サマリヤにて、後へロデも此處に壯麗なる府を建てぬ。四方山の中に立ちたる高三百尺の一孤邱、段々島の上に些の橄欖の樹あり、土小屋五六其額に集く

ふ。馬上ながらに邱上を一巡す。昔の名残には、へロデの建てし街の面影を見るべき花崗石の柱十數本、一丈五尺にして往々一石より成るもの、また山背の窪地に劇場の墟址あり。麥圃の畔、橄欖の蔭に、斷柱殘礎散在す。村の附近に古寺の墟あり、地下室にバプテスマのヨハ子の墓、エリシヤの墓、オバデヤの墓など稱するものあり。村人古錢など持ち來りてすゝむ。山上より西に地中海の寸碧を見る。

旅の興

サマリヤの廢墟より山いくつか越へてシレーと云ふ山腹の村の近くにいたり、馬を繋ぎ、無花果の枝の下に潜り入りて、毛布を地に敷き、少し早ければ携へたる牛乳、パン、ジャム等にて晝食し、午憩す。杏多き所にて、ジャルック君一風呂敷買ひ來りしかど、余はエルサレムにて杏に中てられたれば食はず。ほどり近く泉あり。村の婦人甕を頭にのせて來り汲む。或はこゝにて洗濯をなすあり。いづれも日に焼けて赤黒く、素足なり。或は襟に、或は手首に、或は髪に銀貨を聯ねかけて裝飾とするは珍

らし。極めて稀には金貨をかざれるもあり。シリヤを旅して往々穴のあきたる銀貨のツリを貰ふことあるは、此風習あるが爲なり。一睡してまた馬に上る。岩山を上り下りしてや、平なる浅き谷を行く。午後の日射して、馬上頗退屈す。前を見ればジャルック君は土耳其帽の上に白手巾を被り、棒縞の白地筒袖にして裾の二方を五寸ばかり開くに五寸幅の猩々緋の帯して栗毛を歩ませ、後を顧みれば馬士のイブラヒム君土耳其帽を横ちよにかぶり、眞黒く焼けし顔を日に曝し、荷物の上に兩足投げ出して、ほくく歩

す。やがて二人はしきりに歌ひ出しぬ。云々してヤーモ、
ヤーモ、ヤーモ―ヤーモ、ヤーモ、ヤーモ、何の事か一
切解す可からず。中なる馬上の客も、多くは知らぬ讚美
歌の種をきらして、人に習はぬ「忍路高嶋」を歌ふ。

水なるかな水

やがて此淺き谷は低き山の隈に盡きて、其處に大なる無
花果、ポブラル、葡萄、柘榴など一簇の綠眼もさむるば
かり鮮やかなる小村あり。ドタンと云ふ。舊約の少年ヨ

セフが父の命により十人の兄を尋ね来て坑に打込まれは
ては賣られし所と傳ふ。この處に徑一丈ばかりの泉あり。
エル、ハファイレーの泉と稱す。ヨセフの坑とは例の附會な
るべきも、ドタンは昔より斯る泉の爲に羊を牧すべき地
なりしならん。雨期を過ぎて未だ久しからねば、泉の清
水満々と湛へたるに、旅僧らしきが二人、驢馬を放ち眞
裸になりて、首まで浸り居りぬ。ぐるりの石に繩かけて
繩り居るを見れば、水の深さも知らる。泉の水は溢れて
いさゝ小川をなし、胡瓜などつくれる野の畑へと流れ行
く。吾馬熱き蹄を小川に踏み入れて、鼻鳴らしつゝ水飲